

毎月一四十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



和清山香 兼輯編
會社 所行發
所刷印

現代教育と實生活

石倉新十郎

吾々は生れて、母に模倣し、友に模倣し、學校に入つては教師に又世人に模倣した。そして模倣の間に啓蒙された所は客觀世界の觀望ばかりである。徳育とか思想情操の教育とか云はれても、其れは一部教育家の自己満足に過ぎないのである。實際に力を入れて居たのは智識の注入である。だから生徒は先生を智識の販賣者と心得、使ひ途の列然しない智識を厭や應なしに強制する學校を餘り感心した所とは思つて居ない。出來る事なら試験落第授業料などは無い方が良くと思つて居る。そして自分自身の事となると、本能的衝動に基いて周囲との交渉を考へたり、大概は自分の都合の良いやうに行動して居るのである。其所には大して自己反省もなければ、勿論他からの指導もなく、そして全く自己一流の觀念と一種の自信とが培はれて行くのである。斯く敬養され來つた結果を見るに、唯々客觀よりの自覺以外には殆ど何物もない。

實に現代教育は智的的教育にのみ墮ちたと言へやう。そして學徒に對し眞に權威のあるは殆ど科學のみである。曳いて現代は科學萬能の世であると言へやう。之れが現代教育の社會的結果である。そして又考へて見れば、吾々現代人は生れながらにして此の世は安穩である。普通に

さへして居れば、減多に危害を加へられる心配もなく、飢えて路傍に斃死する恐れもなく、病めば醫學に信頼する事が出来、老死の問題も青年には當分先には押して置ける。だから平素は不安がないのである。此の世に處して現代人の苦痛とする所は本能的衝動から來る實に不平不満である。金が獲られない。地位が得られない。戀愛であれ、嫉妬感であれ、何でもあれ欲する通り得られないのが苦痛である。事實現代人の幸福はたゞ獲得にある。そして其れは皆客觀世界にのみ限られて居るではないか。之れが現代人多數の人生である。

然し現社會の狀態では如何に教育によつて體力を増進しても、又智能が啓蒙され、渾身奮闘努力をしても、誰かが皆獲得に向つての幸福を感じるわけに行かない。殘念ながら吾々大多數は落第生たらざるを得ないのである。我が大衆落第生組よ、到底望みのない及第を夢想して、死ぬまで奮勵力むる勇氣があるか。今にはどうか、其中どうかかと焦慮はしても、薩張り堂にも入らずして、終に佛壇に納まるが必定である。

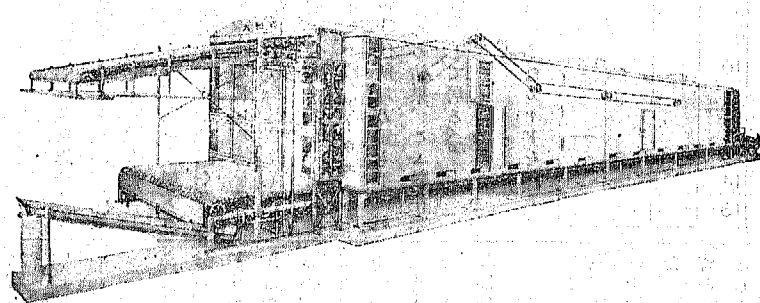
さて斯う考へ來つて見ると、客觀世界には愈々幸福が見當りさうもない。然らば心機一轉主觀世界に乗り替へて見やうかと、折角氣は附いても皆目乘替へ願が見つからない。そこで藝術家や宗教家は如何と見るに、大概は仕樣事なしの自己満足か、然らずんば世を街ふ偽善者として見えぬ。何故なら彼等の實生活を見るに、何等吾々大衆共と區別はなく、科學的實生活を一步も出で居ないではないか。それでは一體學術世界はどうか見ると、哲學者は近來極めて多勢居る様であるが、如何に首を振り立つて見ても、所謂哲理以外に未だ何ものをも出しては居ない。そして此の現實世界と人生とは何等哲學とは没交渉に厭として厭やに存在して居る。科學者が之れまたうさ程研究の發表はするが、之は客觀的自然の觀察と其の考察から生れた理論としてしか何でもない。こんな進歩のないフィルム

謹賀新年

山本三六郎著
化學純綯の完成
工業的完成
伊太利綯會社
現況退原因と其
菅原勇治著
蠶絲業法規要論
改正
¥2.30 ¥1.50 ¥0.30

市田上縣野長
會究研學科絲蠶 所行發
〔振替長野6413番〕

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



【各種型錄贈呈】

二五九五年代表型

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

- 營業課目
- 特許大和式自動輸送乾燥機
 - 特許大和式自動人綯乾燥機
 - 特許帶川三光式乾燥機
 - 特許やまホイ装置
 - 特許サンケー式濾過淨水装置
 - 特許サンケー式廢湯吸器
 - 特許サンケー式高壓ポンプ
 - 特許サンケー式トラツプ

文化に一目置いて眺めても、最も根本的事象は少しも太古と變らない。見よあの太陽の光り具合にせよ、この地球の回り加減にせよ、薩張り變つて居やうとは思はれない。人間製造の方法はやはり在來手段によるが最も簡單且つ經濟的である。そして人間が笑つたり、怒つたり、戀したり、争闘したりする現象は何等文化に禍されず存続して居る。一体文化はどう役立つたかと思ふに、人間の活動範囲を少しく擴げた事と、其の行動速度を僅かに増加したただけである。一般大衆の人生價値に殆ど影響を興へて居ないではないか。

もはや吾人は求め場がない。唯本來の自己に歸るだけである。此所が主觀世界への乗替である。我れ考へるが故に我れありではない。無條件に自分は絕對に存在する。そして宇宙萬物の存在を是認する。そこで自己自由の正體を直觀すれば、唯識を働かせ得る事と隨意筋を活動させ得る事とだけである。之れ以上自由を發展させやうとならば、先づ絕對的に自己を自然の存在と完全一致せしむる所から出發する。此所から眞の安心が發現し、此所から宗教道徳教育政治凡てが生れて來るではないか。

千枚漫語

千葉 高島 生

『正月もいつしか過ぎて我が暮し、また元の道にはまり来れり』——石川啄木の歌である。年賀廣告満載の時報一月號を入手したのは数日前のこと、思ひきや、もう二月號となつた。いみじくも歌ひ出た啄木の歌は實生活に即して居るだけひし、と吾人の胸をうつ。あゝ、『また元の道にはまり来れり』昨今の生活、斯うして段々年老いてゆくかと思ふと、一抹の淋しさが涌くではないか。

近いやうで遠いものは電話の聲、遠いやうで近いものは男女の伸とやら。短いやうで長いものは戀人を待つ時間、長いやうで短いものは過ぎ去つた年月であらう。學窓を出たのもソナナに昔のこと、思はれないが、今年母校の二十五周年だと云ふ。關東大震災は十三年の昔、滿洲事變の勃發ナンカつひ去年のこと、思はれるのに、それはもう四年前のこととなつて居る。二十代から三十代、三十代から四十代と、年齢に正比例して、時の流れは加速度を増すものらしい。

時とは何ぞや——考へてみるとヘンなものである。映畫は動くが映寫幕は動かない。時とは映寫幕のやうなもので歴史はその上に寫し出される映畫である。即ち時は元來不動のものなんだ——ナンテ、偉らさうなことを言ひ出してみた處で、結局分らなくなるから、此方面のこととは、アインシュタイン博士に任せるとして、さて——

がする。藪の値は出る、廿五周年祝賀も盛大に行はれよう、數年間据置きの月給も、今年こそ屹度昇るに相違ない。ドレこの際筆硯を新にして——現代式に言へば萬年筆のインキを入替へて、千枚流の漫語を續けることしようか。

『ヤイ千枚！』今年年賀狀に文句はないか」と先日會つた日から言はれた。あつとも、大に大にある。併し毎年同じ問題を蒸し返すのも大人げないと思ふから、理窟ヌキに所感數項を掲げて、この問題を打ち切りしよう。

時報誌上の年賀廣告が悪いと云ふのぢやない、『年賀廣告を出された各位は別に本會々員宛狀は省略せられ度し』と云ふのが餘分のオチ切だと云ふのだ。この點漸く分つたものと見え、九年末にはソナナ募集廣告の載らなかつたのが嬉しい。簡單な一些事を悟らせるにも四年かゝる、頭の悪い奴相手に理窟を言ふのは、さて、骨の折れることではある。

『喪中に付』は一種の流行(り)の嫌ひがある。香奠の催促ぢやあるまいし、家庭的に無關係の遠方の知人にまで、滅多失禮に喪中の押賣りは必要があるまい。たとへば賀詞だけは遠慮するとしても、平素の無沙汰を詫びたり、相變らざる交誼を願つたりはしたいものである。

役所宛の年賀狀は一番こまる。入手するのは大底七、八日頃と御承知ありたい。同一人から二枚の賀狀に接することがよくあるが、之は先に年賀郵便で出し、當方からの賀狀に接して再び答禮する場合に起ること、想像され、自分に對する先方の印象の淺いことを證明すること、なるから、丁寧すぎて却つて有難味が薄くなる。

靜岡のスポロ(註 ニツクネーム也)から『年賀狀に就て自分は賛成論者だ。一年中の御無沙汰を一枚の葉書で済すことは、よい交換と思ふ。たゞ通り一遍の挨拶でなく、簡易にして而かも趣向を凝らした押印など好きだ。長々しい文句の印刷、角張つた文章体は避けたい』など、意見を書いてよこし、尙御親切にも東朝紙の切抜を同封して来た。

◆平生年賀狀の一つもよこさずに居て、何年かぶりて手紙をくれたと思つたら就職の依頼だ、といふ苦情をよく諸方で聞かされる。年賀狀は下村海南翁のいふ通り人の世の捨石だ。そこに年賀狀の旨味がある。

◆さういふ意味からいつても、年賀狀は、心をこめたものでありたい。何千何萬の年賀狀を出さなければならぬ(一)と得意がつてるやうな人は、兎角に名簿をあてがつたきりで、人任せにしがちである。任せられた者は器械的に名簿の中のある限りの人々へ書いて出し、本人は何處へ出したのやら出さなかつたのやら知りもしなければ、覺えてもゐない。それに一々心などいふ面倒臭いものを籠めてゐられうかと云ふなら、それもそぢやらうな。

◆さういふ心抜きの年賀狀は同じ人から二枚も三枚も来る事あれば、見も知らず、縁もゆかりもない人から着くこともある。代議士が選挙區へ御機嫌取りの運動用年賀狀、廣告でないやうな額をして廣告の用を助める廣告年賀狀、あはよくば先方から答禮のハガキをせしめよう算段の投機的年賀狀——折角貰ひながら、んざりさせられるのが相當に多い。

◆その中に次手に、んざりさせられるのは、封筒に名刺を封じてくるのと、卷紙に空疎なる御慶の辭を物々しく書いて來ることである。差出す人は一かど心を籠めた積りかも知れぬが、受取る者に取つては一々封を切らなければならぬし、大きさが違ふので、整理に困る。心を籠めるにも籠め方があらうといふものである。

◆が併し、平生あの人にくれる年賀狀が誰のよりも一番美しいからとて、その人に投票する選挙有権者が東京の眞中にさへあると聞く。濫發か濫發ならぬかは、けだし凡俗の知る所に非ずか。(冠)

◆移村楚人冠先生の筆らしい。誰でも思つてるやうな事を、簡明直裁に表現されてあるから、スポロの好意を謝する意味で、茲に轉載した次第である。

アドレスの整理に就ては各自思ひ、工夫を凝らして居ること、思ふ。年賀狀を一括して年末迄保存して置く者——之が一番不精者のやり方で之を分類するが、切抜いて挿込帳に整理して置く者は上の部であらう。特にアドレス簿を備付けて置けば申分なしであるが、數百千名の住所氏名を如何に分類するか、之が研究ものである。イロハ順、アイウエオ順、ABC順共に不可、住所地方別も不便が伴ふ。私は多年苦心の結果、こゝ數年來次のやうにして整理して居る。

置くのである。前掲カード氏名欄の下の區別は、その關係別を記入する欄である。

○親戚關係 ○中學關係 ○宮城縣關係(舊任地) ○兵庫縣關係(舊任地) ○千葉縣關係 ○縣内縣外關係 ○縣外縣內關係 ○宗教關係 ○千曲會關係 ○雜

千枚の整理辭と言つたら自分でも可笑しい位で、嬾に言はせれば『病的』ナンダさうだ。アドレスの整理狀況のやうな私事を打明けるのはどうかと思つたが、年賀狀の語ついでに公開して、會員諸君の御参考に供する次第である。

アドレスの語ついでに、千曲會の名簿に就て、昨年八月號と十二月號に、篤之君の意見が出て居たから、之をもととして贊否の意見を開陳して置きたい。

一、勤務場所と住所とが雜然として居ること。之は全くまづい。兩者を二欄に分け、不定の場合は空欄にして置いたらどうか。勤務場所の所在地を括弧内に入れることは、時に必要の場合もあるが、農林省や府縣廳の所在地を入れることは、寧ろ滑稽である。尤も之は様式の上、一切平等主義に立脚して居ることと思ふから、あつても邪魔にはならない。尙本籍(府縣名だけで可)を載せ得れば好都合である。

二、卒業年次別、科別の配列法。之は從來通り一向差支ないと思ふ。併し之は千枚のやうな初期卒業生の立場からみたことと篤之君のやうに『之を繕く時、言ひ知れぬ反感氣分をそゝる』者が多いとしたら、新卒業生の出る度に配列の仕直しをする煩しきはあるけれど、別に年次別、科別の索引表を附することを條件として、變更に賛成するものである。

Table with columns: 氏名, 住所, 勤務先, 年賀狀. It contains a grid for recording names, addresses, workplaces, and New Year cards.

教婦養成科内要

同窓生諸君の中に當科の入学に關して質問して來られる方が時々あります。多分他から質問されてそれを方向轉換してよこしたのと思ひます。...

第一章 總則

第一條 製絲教婦養成科ハ製絲業ノ教育ヲ施スヲ以テ目的トス

第二章 修業年限

第二條 修業年限ヲ二ケ年トス

第三章 入學及在學

第五條 入學ヲ許可スヘキ者ハ品行方正志望堅固ノ女子ニシテ左ノ各項ノ一ニ該當スル者ヨリ之ヲ證衡ス

一、高等女學校卒業者又ハ之下同等ノ學力ヲ有スト認ムル者

二、高等小學校卒業後一ケ年以上製絲業に從事シ其ノ成績優秀ナル者

第四章 卒業

第十二條 第二學年ノ課程ヲ修了シタル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第五章 授業料

第十五條 授業料ハ一學年拾八圓トス

附則

第十八條 本規定以外ノ事項ハ總テ上田製絲專門學校規則ヲ準用ス

前記規定にて知る如ク入學有資格者は第一項に依るものと第二項に依るものと二種ありますが高等女學校卒業程度...

學費に就ては昨年四月から自炊寮の設備が出来たので通學出來ぬ遠方の人にとつては誠に都合になり一ヶ月十圓以内で充分可能と思ひます。卒業後の状態を申し上げますと官廳四、學校八、工場六〇、其他三、家庭七五で給料は任...

三、選科又は研究生に對し符號を附すること。之は全く可笑しい。全然區別を無くするか、それが不便だとあれば『選』とか『修』とかすべきである。兎角親切が過ぎると却つて非禮になり易いことが世上に多い。之もその適例の一つ。

四、本欄がイロハ順で、索引がアイウエオ順であること。全く篤之君の言ふ通り不体裁だ。次回に統一するとしても、イロハ順は不便であるから、アイウエオ順かABC順にして欲しい。

五、官位勲職名その他、この種の事項は今後とも附けてはならない。それこそ『反逆氣分をそゝる』こととならう。會費の納入状態から、月給、妻君の有無、子供の數まで必要とあらば、それは本部の臺帳にだけ記入して置くこと、したるよからう。

六、名簿の末尾に餘白をつけること、之も思ひ付てはあつたが、それより配列の行間を廣くして置く方が便利であらう。尤も之は、頁數が増して不經濟とは思ふが。

職員名、會則等を色刷とすること。之は却つて不体裁である。たゞ見出し別に色紙を挟むことは結構である。

無關心でみれば別段問題のないやうな名簿の編輯も、當事者にしてみれば色々な苦心が要る。勤務部員——特に須田君が、このハエない仕事に渾身の努力を捧げて居られることは、全く感謝すべきである。昨年十一月號に載つた會員名簿の比較研究をみて、その一斑が窺知出来る。會員もオ互協力して、理想的なものを作り上げようではないか。篤之君は、『編輯部が多忙で、その原稿整理が出来ない』とあらば、自分が原稿を作つてもよい』と言つてゐる。それだけの熱意があつてこそ、色々な注文も出ること、敬服に堪へない。

一月號TY生の『重い水』の紹介は實に有益な記事だと思つた。むづかしい新研究や、時事問題を、肩の凝らない程度に平易に解説して、會員の常識を深めるやうにすることは最も有意義である。それには編輯部から夫々の方面に對して、課題を設けて執筆を依頼することにして頂きたい。

賀狀偶話

細川 辰吉

今年のは猪の年廻りか吾輩見た様に世間の狭い者もしたまは賀狀を貰つた。貰つたのが一六六枚、やつたのが一五一枚之を大別すると

Table with columns: 差出數, 受取數, 過不足. Rows: 知人, 學友及學親關係, 校關係, 里關係, 職業關係, 計

賀狀の形式や字質の吟味は千枚子の御託宜に譲つて賀狀の差出高と受取高の内譯を吟味して見ると右の様になる。

知人關係で貰はないのがあるのは勤務先へ差出した爲め御用始めの四日以後でなくば受取らないのに起因すると思ふ。現に吾輩の職業關係で三十一枚の差出し不足の大なる原因は勤務先で受取りし爲めあるからで勤務先で貰ふのは甚だ先方に對して相濟まぬこととなる事が多い。まさか松の内を過ぎて十年元旦で出すのも汗顔の至りだ。學友及學校關係で貰ひ不...

足のあるのは一寸嫌な氣持がする。就中同級生が一錢五厘の葉書を惜しむてか、それとも手間を惜しむてか實にだらしが御互に年に一度位は賀狀の交換をしたいものだ。斯る者には來年は註の入つた特別賀狀を差出す心算だ。親類關係で寄こさないのは澤山の賀狀で書き落しと善意に解釋してゐる。職業關係のは驚方から連名で出した分に對する賀狀が相當多い。

吾輩は賀狀を受け取る時とすぐに消印を見る。同じ一月一日でも午前と午後では感じが違ふ。わけて四日頃のスタンプと見たら嫌々やら御通信に預つたものと見きたら大概四日以後の賀狀は今年限りで來年はこつちから出さなければ來ないのが多い。之が二年も續けば勿論當方も遠慮する。

一番愉快なのは元日の朝茅屋に配達された賀狀だ。校友會名簿の作成も勤務先を主としてゐる爲學校關係で賀狀を貰ふのは勤務先宛のものが多い。堅い机の上にはクシャ／＼と賀狀が積まれるのと軟い盤の上で松風の音を聞き乍ら一枚々親しく見るとは氣分の上で雲泥の違ひだ。そこで吾輩も成る可く自宅宛に差出してはゐるが。來年からは名簿作成も一つ考慮して貰ひたい。

一番迷惑なのは喪中欠禮の葉書が正月舞ひ込む事だ。こちらは知らないの賀狀を出した後で何とも恐縮してゐる。喪中欠禮の葉書は遅くも暮れの二十日迄に届く様によこして貰ひたいものだ。賀狀を出した後ではこちらが恥さらしの様なものだ。それから喪中といつても色々あるがまあ三月も経つたのは須らく賀狀の方が氣が利いてゐる。年は改まるのだからあまり拘泥したものでもあるまい。死亡通知を出さない所へは賀狀の方がましとも考へる。

それが賀狀を連名で差出すことも職業柄本年もやつたが個人宛に差出したのは、氣が利がなかつたと貰つて氣が付いた。自分の廣告にもならないし保存してもつまらないから連名で來た賀狀はすべて早々棄却してつた。あれこそ新聞か千曲時報を利用した方がよい。それから吾輩の姓名を誤字だらけにしてあるのが最も氣持が悪い。吾輩の存在を認めない申譯のものとして。親類がつけた名前に文句を云つても始まらないが姓名だけは間違へない様にしたいものだ。賀狀早々頂き御禮申上げ。

身邊雜記

橫濱 正木 章三

僕は人を誤解したくない。だから人に誤解されたくない。昨年十月末發病し十二月初旬一旦恢復したのを再發し、終に病床に新年を迎へるの愚を經驗し、今日に至れる次第である。爲に年末年始の挨拶にも欠禮し、先輩友人諸兄に御無沙汰の失禮を重ねて仕舞つて、止むを得ぬ事とは云へ、申譯無く思つて居る。然し立春の候となり日に日に快方に向ひつゝあり、先の失敗を繰り返さぬ様充分自重し靜養して居るから他事乍ら御安心を願ひたい。

大正十五年(昭和元年)の春、上田の製絲科へ入學した時を以て、僕がこの國の蠶絲圈内に踏み入つたものとすれば、今年で恰も十年になる。人に知れぬ小さな足跡を残して一昔、イン・デイケードを経る譯である。この秋を秋聲に魅された云ふ事は非常な不幸であり、ひどく残念でもあるが、然し寝込んで仕舞つたからには、之はファースト・デイケードの働きに報ゆる安息であり、來る可きセカン・デイケードの伸びに備へる休息であると善意に解して、自ら慰めて居る。やがて充分體力回復の上は筆を執つて、長い御無沙汰に答へる考へて居る旨を、時報紙上を借りて御詫び傍々辱知諸兄に御報告致す次第である。(一一二、八)

假住所 横濱市神奈川區白樂四〇宮田方

圍爐裡を見て

山崎 壽

蠶十四卒、クラス會雜誌「圍爐裡」七號が今朝やつて来た。丁度休みだったので...

中曾根まつ子さんの御挨拶には、ユウモラスな處が多分あり、皮肉りつゝも...

卒業して九年、獨身者は東京在住の依田、永井兩君のみ。銀座を歩し得る御當...

總べてがユウモラスな筆致でなされて居た。眞剣なのは中島君と氏家君。

ではあるが、十年説を強調したい。それは卒直に言へば全員が揃つて居る中に...

縁起の悪い事を云ふ奴だ、と咎められるかもしれないが、養蠶科で死亡者の無...

卒業後十五年迄、百二十年、三十年の後迄も誰一人欠ける事なしに活躍したい。

二十五周年記念に出来るだけ大勢、募集するに就ては異論がない。今から心掛...

會計報告を見ると、本年度分會費十六圓しか納入してない様だが、とすれば八...

なつかしい同僚の文藻に接し、断片的に、卒直に自分の感想を披瀝した。最後...

圍爐裡に限らず千曲時報等でも、筆支えない範圍内に於て成る可く、筆者は勿論...

第四回文部省スキー講習會狀況

小林 尚一

暮から積雪少なく例年菅平に開催される文部省スキー講習會が危まれて居つたが...

に氷面上を滑つて居る様なもので可成困難だつた。本講習會に受講して非常を得...

千曲會員各位

上田蠶絲專門學校

入學案内

- 一、募集人員 養蠶科、製絲科、絹紡織科 通計約百名
一、出願期日 試験檢定 一月十一日より三月十五日迄
一、試験科目 數學(代數、平面幾何) 英語(英文和譯)...

上田蠶絲專門學校

上田便り

菅平道線編入 菅平スキー場開張の昭和三年以来地元長村及上田市で運動中であつた土合菅平線の町村道は十二月廿七日附の縣告示で縣道に編入され今春雪解けを待つて大改修が行はれ曲所には頑丈なテスリを設けられる管でスキーヤー及夏の登山客にとり非常に便利となる事になつた。

北向觀音の二年詣 十二月三十一日夜から一月一日朝にかけて行はれる別所北向觀音の二年詣は本年は三十一日夜雪から爽となつた爲め參詣者は例年の半分であつた。

太郎山關引退す 上田市出身の太郎山關は多年本場所の花形として盛名を馳せたが今回功なり名遂げて引退し年寄浦風を襲名した。

年末年始の信越スキー場來場者 雪飢饉は暮も押詰つてから断然降つたので各スキー場は年末年始の休暇を控えてサラリーマン、學生達が一時にどつと殺到した。暮の廿八日から正月三日迄の長野運輸事務所調査に依る主要降車スキーヤーは田口が八千八百四十人、關山が五千五百三十五人、上田が三千八百六十二人、上諏訪が千三百二十四人である。内菅平は東京一千九百八十人、名古屋三百一十一人、大阪五百六十二人、その他一千十人、約二割は女性スキー、新興キノマのスター市川春代等も其中に加つてゐる。

北校の増築開始 上田小學校北校の増築は一万五千四百圓の豫算で二月四日より工事を開始した。五月末竣工の豫定である。

八日豊縁日 上田市外神川村國分寺藥師堂縁日は一月七日夜より八日にかけて行はれたが天気はよし道はよし小春日和の暖さだったので人出は非常なもので約五万と稱せられ獨特の鳥田樂、達摩、福助助の店で賑つた。又別所温泉北向觀音

も藥師へ詣つたものは觀音へ詣つる事になつてゐるので參詣客で賑つた。丸子鐵道及温泉電軌は終夜運轉を行つた。鹽試上田支所長決定 既報の長野縣鹽試取締所上田支所長に轉ぜられた長野縣の後任として飯田支所長永田平君(黨八)が轉ぜられる旨一月八日附を以つて發表された。

上田驛下車スキーヤー二万人 一月十一日現在上田驛下車スキーヤーは菅平一七三七三人、新鹿澤二二七一人で其の内一割は女性である。

全日本スキー選手権大會菅平選考大會 銀盤に潮を争ふ第十三回全日本スキー選手権大會菅平選考大會は一月十二、十三日兩日に亘つて菅平スキー場に於て長野松本、諏訪、上田、菅平、平穩、須坂中學、上田中學、上田蠶專の八團體七十餘名參加の下に舉行この日快晴乍ら積雪僅かに三十五種加ふるに雪質悪くコンディションは不良で記録は振はなかつた。戦績左の如し。

△十八キロ(複合を兼ねる)少年組 富井匡(長野)一時間三七分、成年組 山崎誠(菅平)一時間二八分二〇秒、壯年組 岩崎三郎(諏訪)一時間四二分五五秒、△五キロ滑降 北島勇(菅平)四分七秒

△複合競技 少年組 小林祐邦(長野)二八八點七成年組 北島 勇(菅平)二八七點七壯年組 岩崎三郎(諏訪)二二八點

△ジャンプ 少年組 小林祐邦(長野)一三四點六成年組 武田留作(平穩)一一〇點四△三十二キロ離走 菅平チーム(山崎誠北島勇、前澤清市、伊藤正雄)二時間四十三分三十五秒

大會の華ジャンプは積雪少く懸管ジャンプでは危険の爲め日本ダボスに設けた假ジャンプで行つた。

上海から雪の珍客 雪の菅平には一月二十一日遙々上海からドイツ人ハイנטツエ氏外十七名の外人が訪れた。その内六名は美しい女性である。一行は二月十二日頃迄滞在の豫定である。

上田小唄、眞田香頭發表さる 北信毎日新聞が懸賞募集し上田情調を讀み込んだ新曲「上田小唄」眞田香頭がボリドルレコードに吹込まれ一月廿七日から發賣された。歌詞は左の如くである。

上田小唄 作詞 室賀公徳 作曲 近藤 政二郎 吹込 淺草メ香 伴奏 日本ボリドル管絃樂團

一、のぼる朝日は 太郎山のほとり 松に色濃い だて姿 サテサテ ソウカイ ソウカイナ 人は變れど 想ひはのこる 華のご城趾 夢の跡 三、絲になりたや 蠶の絲に 四、花の上田の 下道小道 今もあの娘の あで姿 眞田香頭

作詞 丸山久夫 作曲 大村能章 吹込 東海林太郎 伴奏 日本ボリドル管絃樂團

一、旗は六文銭 サテ 心は千曲川 残る功績は ソレ 千代萬代に ヤレヤレ ソウデハゴワセンカ 二、昔戀しい サテ お城ののどか 今も櫻の ソレ ひとごかり 三、お城固めの サテ お獅子の舞は 開くも床しや ソレ 懐しや 四、眞田三代 サテ 名所の街に モダンネオンの ソレ 春化粧

菅平國際スキー場の候補地に擧げらる 國際觀光局では今年の大事業として國際スキー場を決定し此處に五十萬圓を投じ國際スキーホテルを建設する計畫を樹て

菅平、勢峰、志賀高原、妙高山麓、奥日光、上越等を候補地とし調査する事となり田觀光局長は二月四日より八日に亘り菅平、志賀高原、妙高山麓のスキー場の現地視察を行つた。

鐘紡上田工場地均工事遅る 上田市の鐘紡工場敷地均工事は失業救済事業として年末から開始の豫定で市より設計書を鐘紡本社に提出したが折合はず再三設計變更し工費の關係上埋立の土砂を他よ

雪の菅平へ！ 菅平スキー場は長野縣上田市外長村にある。海拔一、三〇〇米内外の標高を維持したる高原、上信國境にそり立つ猪岳(二、一九五米)と四阿山(二、三三三米)の頂上から緩く曳いた大傾斜面で、その雄大なスロープは雪の王者シユナイダ氏が、スキースのシユワルツ・ワルドに彷彿たりと激賞した所である。

交通は信越線の上田驛で下車、上田から眞田まで電車、眞田から菅平口まではバス、其處からスキー場まで六軒、スキーを穿けば一時間で行けるが、馬に乘れば、老若男女如何なる人々でも、徒歩の辛さを啣つことなく、完全に乗物を利用して楽々とスキー場まで行かれる。

雪質は、粉雪の日が多く、積雪は一米内外が普通であるが、全部芝生の高原であるから、極く僅少な雪量でも完全に滑走出来るのが菅平スキー場の他のスキー場に比較して断然優越せる一大特色である。

宿泊設備としては、菅平ホテル、高原ホテル、鐵道省「山の家」其他に旅館、農家等があり、全部の収容力は約二千人である。宿泊料は一泊三食で菅平ホテル一圓八十錢「山の家」一圓十錢其他の旅館、農家等は一圓十錢乃至一圓八十錢である。各旅館、農家には、貸スキーの準備があり、一日一臺の料金二十錢。

汽車賃は、東京、名古屋、大阪各鐵道局管内主要各驛から菅平口まで(汽車、電車、自動車を含む)割引がある。菅平口から各宿泊所までの馬糞賃は上り三十錢、下り二十五錢である。但しこの間の下り六軒は、スキーで滑降すれば愉快である。

海拔二、一九五米の猪岳登山は、誰でも試むべきものである。上り三時間下り一時間半、頂上には物凄い樹氷の怪物がある。下り六軒の滑降は、豪快無比スキーの眞の味は此處で初めて味はれる。

菅平から別所温泉へ 雖も大なる勞苦の後に、大なる休養を欲するが如く、雪深い菅平スキー場で、充分にスキーの滑走を楽しんだならば、その歸りには當社沿線の別所温泉で、温い湯煙りに包まれて、ゆつくり休憩するのが、心身の保養上最もよいことだと思ふ。別所温泉は上田驛より電車が、最も適當な位置にある。旅館は十二軒、別所の設備があるが、別に共同浴場が四ヶ所あり、就中石湯は天然岩石の浴槽で、温泉は岩間より湧出し、古くより名湯として知られてゐる。

當社では温泉行スキーヤーの爲め左の様なクーパー券を發行してゐる。

◇日歸券 (上田一別所温泉間往復電車賃一食料) 青色 一圓十錢 白色 一圓四十錢

◇宿泊券 (上田一別所温泉間往復電車賃宿泊料) 青色 一圓十錢 白色 一圓四十錢 右のクーパー券は、菅平ホテル前の旅行案内所及當社各驛に於て發賣をしてゐる (上田温泉電軌株式會社)

母校ニユース

廿五周年記念祝賀式日程決定 十二月廿四日午後一時より校長室に於て評議員會を開催し左の如く廿五周年記念祝賀式日程(原案)を決定した。

- 式日は十月廿七日より十一月三日に至る適當なる日を選びて決定する事
第一日 祝賀式(學校) 午前十一時—十二時
勸進者記念品贈呈(千曲會)
記念會館寄贈(千曲會)
祝賀式(學校) 自十二時至一時
來賓校內案内 自一時至三時
壽像除幕式(千曲會) 午後三時
夜會(上田市) 午後六時
提灯行列(學校) 午後六時

一、卵核及極體の行動より見たる單性蠶の遺傳及其の論議 佐藤春太郎
一、同廿五日(製絲紡績部擔當)
一、スキト寸談 小林 尚一
一、生絲の害蟲に就て 窪田 潤
二月一日(物理化學部擔當)
一、青眞實に就て 須田 圭二
一、カリウム定量、亞硝酸パペルト法に就て 細川 豊

校友會記事

寒稽古開始さる 一月十五日より二週間に亘り毎朝五時半より七時迄母校道場に於て廣川依田兩師範指導の下に柔剣道の寒稽古が開始された。弓道部の寒稽古は今年始めての試みで十六日より二週間毎朝七時より八時五十分迄である。學生等は零下何度と云ふ寒さも物かは廣い道場も一杯に元氣よく勵んだ。職員では學校長を始め和田、石倉、岡、原田、佐藤(春)、谷、蒲生、野口、山口、小松、小林(尚)、枇杷木、市原の諸氏の顔が見えた。特に岡、野口、小松、小林(尚)、枇杷木、市原氏等が學生の仲間に入つて稽古せられたのは偉とするに足る。最終日二十八日には汗粉の塵塵があつて盛會裡に終了した。皆勤者は柔道部一年間四十三名、三年間十一名、剣道部は一年間六十二名、三年間十五名、弓道部は一年間十五名の多数に達した。

柔道寒稽古納會試合 一月二十八日午前五時半より母校道場に於て柔道寒稽古納會試合を舉行した。試合成績左の如く

Table with columns for names and school affiliations. Includes names like 望月(蠶一), 小柳(蠶一), 岩崎(紡一), etc.

決勝戦
大將 塚中
副將 小諸商
一、三組
先鋒 武井
二、二組
小川

Table showing tournament results and names of participants, including 大將, 副將, and various student names.

第一回蠶學談話會

(千曲會養蠶部會)

本誌前號に於て豫告した通り、今回第一回蠶學談話會を母校に於て開催する事に決定した。来るべき養蠶期を控えて、講演と、會員の研究發表を聴き又養蠶業界種々の時局問題に就て研究論議せられんとする諸兄は蠶、絲、紡科の何れを問はず進んで御參會下さらん事を切望する。

期日 昭和十年二月廿四日(日)

午前十時(正)より

午後一時より

會場 上田蠶絲専門學校養蠶部

當日プログラム

講演 午前十時より正午迄

生物變化の機構に就て 佐藤春太郎教授

研究發表 午後一時より

一、天蠶寄生蠶の一種に就て 中澤 利三郎

二、桑品種の三型と植付後に於ける收穫量の消長に就て 宮城 博

三、土質と桑葉の品質との關係 須田 圭二

四、生絲の類節の生成に就て 茅野 功

五、蠶蛾微粒子病検査法の正確度に就ての考察 勝 又 藤 夫

討 議 午後三時より五時半頃迄

一、技術問題

(イ)養蠶と絲質との關係

(ロ)種繭育に於ける經濟育蠶法

從來種繭飼育は生理的飼育に主眼を置きたるも今後は更に生理的にして尙且つ經濟的の種繭飼育法の要ありと信ず。如何。

二、政策問題

蠶繭處理法(養蠶製絲兩方面の立場より觀る事)

以上相當大きな問題であつて短時間内に盡す事は勿論容易でないが時間の許す範囲内で窮屈でなく論じたい。出席者は即討議者であるから之等諸問題に關し夫々の立場より諸賢の構想を準備せられん事を乞ふ。(山口記)

七久里會の記

去んぬる十二月號の本紙で上田近在及歸郷千曲會員を中心とする新年會の催しと題して豫告を出した事がある。實は此の會の端緒ともいふべきは昨年の正月三日地元の倉澤大入、竹内(善)君、山本(友)君と、集り合せて、松岡兄、井澤兄と筆者、それに御來遊中の遠藤先生を合せて七人の花屋ホテルでの懇然の會合に初まつた。肩托のない元旦の三日、話に花が咲いて、夜の更くるをも知らなかつた。温泉場に加ふるに厄除觀音のある此の土地のこんな催しは吾々少數の者だけのものにしては餘りにも惜しいものであると思ひ來年は少し範圍を擴げて見やうといふ説に一致した。

此の會では思ひさま大風呂敷を擡げるもよし、不平不満の總てを吐いて了ふもよい。まこと思ふ事は言はざるは腹ふくるゝわざである。何處かにその吐き場所を求めがよい。そして此の樂にもならぬ過去への未練や不満は全く打捨て過去と未來にはつきり一線を劃して新進の意氣で未來に生きる計畫を樹つべきではあるまいか。そこに新年を慶賀するの意味があるのだと思ふ。特に多數の人々が集まつて此の線を意識する事は意義の有る事と思ふ。平凡に考へて行けば「目出度さは中位なり俺が春」でしかない。恐らく如何に朗かな元旦が巡り來やうとも吾々凡人が人里遠く離れた山の中に一人だけの新春を心から慶賀する氣になれるであらうか。抑々社會人として多くの人々がお互に數々の御慶を述べ合つてゐる中から形の上から自ら年が改まつたのだ、齡も増したのだ、平凡に過ぎてはゐられない、進歩せねばならぬのだ等と様々の事を意識して來る。形から心への状態であらふ。そして自ら、自己を意識し他人を意識して來る。又人々が己を奮發させたり自信を強めさせたりしてくれる。眞實に人生問題を考へるのも此の時であらふ。

昔の人が正月を遊ぶ月——否、休養、修養、營養の時——としたのは誠に賢明な方法であると思ふ。實際に吾々の様なせゝこまじやがこんな事を考へるのも、一年中只此の年の始めばかりであるなど、こんな事を考へながら此の正月元旦に意の有る人々が窮屈でなく義務的でなく、随時随意に集まり得る様な會を作つて見たいといふのが吾々の目論見であつた。そして豫告を出したのである。豫告はしたが皆なか／＼忙しい身になつてゐるので實はどれだけ集まつてくれるだらうか等の疑をも持つてゐた。

所が、所が夫々の繁忙や急の旅を控へて居られたであらふにも拘らず、北は秋田から南は四國の端に至る迄の諸兄が、そして凡ゆる方面に職場をもつて居られる人達が、午前十時から陸續と參會、遂に三十三名の多數に達した。豫告には午前からのといふのを地元幹事が悪い事とは思ひながら夕刻の方が興がのるであらふと勝手な推測から一人決めしてゐた事や又萬事に不行届きであつたにもかゝらず大したお叱りもなく全く水入らずな愉快な會合をする事が出来たのは備へに參會者諸兄の誠意の然らしむる所と幹事一同敢て改めて深謝の意を表する次第である。

會場は別所温泉花屋ホテル、午後三時半記念撮影、四時、竹内地元幹事の挨拶により開會。續いて地元長老倉澤大入の例のユーモラスの御挨拶。又特に御繁忙中を不會の爲に馳せ參じられた農林省上野榮仁氏の自己紹介を兼ねての御挨拶があつた。續いて一端から夫々の自己紹介があつた。姓名から原産地、職場を述べ、謙遜やら自慢やら各々の個性が表れてゐて却々面白い。時節會費は一圓五〇錢であつたにもかゝらず、飲む程に酔ふ程にはじめは相當傾聴された自己紹介も終ひの十人位ははやや興奮中に非り去られて了つてゐる程速かに宴酬となり相當のメートル振りであつた。遂に老若

入亂れて(といつても四十四五歳以下の人はかりて皆若者)夫々のグループを作り、鼻と鼻とをすり合せて何やらわめてゐる人もある。斯くて何時の間にか時も過ぎて、夫々の職場へ旅立つ人、家へ歸る人も出來た。残つて麻雀に熱をあげると、黒白を闘はすもの、卓球に汗を流すもの、一管を擡へて來る音楽好きの者、何れも入浴してモトを取る等の人もあつた。結局例の地元の數人は十二時を過ぎるまで居残り、家には新妻も連れて來てゐるから歸る／＼と頑張つた浦里村の山下君、同じ村の井澤君も、西鹽田の山本君の發言で到々三人共泊り込みの客になつてしまつた。あれから後の事は筆者等の知る由もない。尤も皆品行方正の人許りではあるが。

此の會を利用して一五會の諸君(七人)は舊臘二十五日忽然として長逝された。北帝大の故小林實一兄の事に關し相談される所があつた。こんな會合の爲にも自ら一つのチャンスを得られた事と思ふ。更に積極的の此の機を利用されん事を望む。

集まれた人々は比較的若い卒業生であつた。然し獨身者は半數以下であつた。又三十三人中蠶二十八、絲四、他一人で、絲、紡の方が多と多く集まつて下さると面白いと思ふ。會の趣旨からいつて科の差別など取つて着けたくないが、切角集まつて下さつた人々が同じ科の人が少いと話しにも張合が抜けるといふもの、今年には急造ではあり皆豫定の事で御繁忙の事と思ふが此の會が悪いものでないなれば來年はこんな意味から地元だけに於てもっと多く応援が願ひたい。特に母校側が案外少かつたのは遺憾であり遠來の客に對しても濟まない事と思つたもう一つ特に無理をされての御出席は御迷惑でせうが先生方にも御都合次第で御

參會下されば誠に幸である。

開會の時刻に就ては今回は何とも申譯がない。次回は必ず豫告通りにしたい。又は參會者側から幹事宛出來るだけ豫め御通知願へれば好都合である。

更にもう一つ此の會も生れたからには名前が欲しい。そこで一部の方々に於ては、別所で開く限り「七久里會」にしてはと、齋藤さんが名付親である。今後は諸兄の御異存のない限り本會を「七久里會」とする。何卒御愛顧の程を。

因に初會であるので左に參會者の芳名を記録する。(イロハ順)

井澤 喜三 市川 信一 友野 正路

茅野 正三 和藤 省三 竹内 榮仁

中島 正三 加藤 省三 上野 恒次

倉澤 美徳 香掛 久雄 熊谷 通雄

久保 忠雄 山本 友之 阿部 丈雄

山下 信章 山本 友之 阿部 丈雄

赤池 信章 山本 友之 阿部 丈雄

櫻井 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

北島 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

宮坂 正三 浅野 清一 齊藤 菊雄

本會記事

十二月二十六日 小林實一君(蠶十五)長逝に付遺族へ弔電を發し在臺同窓の小泉清明君に對し厚意を發す

一月八日 中會根誠一君(絲廿一)長逝に付遺族へ弔電を發し群馬北奥兩支會長へ通知す

一月十五日 馬場政友君(絲十)長逝に付遺族へ弔電を發す

一月十七日 佐藤彰二君(蠶九)の告別式執行せらる。蒲生理理事長會葬す

一月二十三日 林清市君の通知により井上泰利君(絲十九)の長逝を知る。遺族へ弔電を發し諏訪支會長へ通知す

一月二十四日 品川末夫君(初九)長逝に付遺族へ弔電を發し兵庫支會長へ通知す

一月二十七日 小林實一君の葬儀郷里に於て執行せらる。蒲生理理事長以下附近在住會員會葬す

二月五日 會費未納の各位に對し至急納入方依頼狀發送す

二月六日 仙場秀次郎君(蠶)逝去に付遺族へ弔電を發し東京支會長へ通知す

叙任辭令〔母校之部〕

十二月二十二日 助教授 須田 圭二 書記 依田 啓藏 十二月二十八日 四級停下賜 教授 早川 直瀬 五級停下賜 全 佐藤 利一 全 原田 親雄 全 岡 徳治郎 全 内田 浩 六級停下賜 全 金子 英雄 全 十月一日 教授 和田 仙太郎 叙勳三等授瑞寶章 一月十一日 副手 副田 好美 願ニ依リ副手ヲ免ス 一月二十六日 副手 山本 賢市 願ニ依リ副手ヲ免ス 一月三十一日 副手 青山 武 叙任辭令〔舊職員之部〕 昭和九年十二月十日 步兵第三十一聯隊 附陸軍歩兵中佐 田剛介 岩手醫學專門學校服務ヲ免ス 補歩兵第三十二聯隊附 昭和九年十二月二十四日 蠶業試驗場技師 勝木 喜董 二級停下賜 昭和十年一月十一日 臺灣帝國大學教授 田中 長三郎 五級停下賜 叙任辭令 (千曲會之部) 昭和九年十一月七日 公立實業學校教諭 山口 貞周 公立學校職員年功加俸令ニ依リ昭和九

支會通信

近畿千曲會總會

十一月十一日午後二時より商工業の中心地大阪南地本みやけに於て近畿千曲會總會を開催した。近來にない盛況で東は江東伊吹の麓より南は黒潮渦巻く紀州南端より、ハイキングに好適な今日一日を犠牲にして集まるもの正に二十名。久保田支會長から開會の挨拶に續いて會務報告後本會より懇々御出席を忝うした林理事より二十五週年記念事業、各支會の代議員會提出問題、學校の近況等に關し久し振りに信州辯を承はつた。議事が一通り終ると愈々開宴、酒杯一巡發音の明瞭な中にと、自己紹介が始まつた。自宅附近の名勝舊跡を宣傳して旅館から、少し貰つたのでないかと疑へる者あり、拙宅へ御出での節は、御土産を持参などと厚かましい者もある。此んなどころへ行かうものなら却つて赤字が出る。段々アルコールが血液の循環を助けて來ると其處此處に奇聲を發する者あり亂舞する者あり、朦朧たる中に散會した。然し其の間校歌を合唱したことは一同記憶が確かである。左に當日の出席者を紹介す。(河井記) 大阪府 藤井 周藏(蠶六) 林部源三郎(絲一) 久保田一徳(絲四) 安井 義忠(絲四) 河井 正(絲七) 大久保 直(絲五) 伊藤友次郎(紡二) 河西 尙一(紡二) 佐藤 一(紡二) 滋賀縣 井澤 喜三(蠶六) 向井 孫市(紡三) 奈良縣 櫻井 卓三(絲三) 山田 保士(絲六) 本多 懋(絲九) 和歌山縣 森本爲之助(蠶七) 桑田 庄七(蠶八) 山口 榮治(絲三) 湯澤 稔(絲四) 神崎 碩夫(絲七)

千葉のつどひ

千葉縣は東京支會に包含されて居るが別に獨立しようと云ふ野心がある譯ぢやないけれど、同じ縣内に住む會員だけだに一回位は會合して懇談するのも宜からうぢやないかといふので、高島を音頭取として、一月二十六日午後三時から、千葉市の料亭一力に於て、懇親會を催した。三時から五時迄お茶を飲み乍ら雑談五時から宴會と云ふ通知を出したら、東京の原田オン大は、お茶に用はないと言つて、五時すぎにやつて來た。ヤハリ頭が公園のやうな廣い庭の中に孤立したハナレの一室であるから、誰に憚る所もなく快談爆笑に終始し、折角侍らせた數名のお美妓も所作なささうであつた。九時頃散會した。千葉縣關係の會員は次の通りである。(内櫻井、小林の二君缺席) ○高島秀男(蠶二) 誰かの奥さんが「千枚ツテ苗字かと思つた」と言はれたさうだ。又「千枚ツテの書いたものを見て、氣ムツカシ屋のコワイ人と思つて居たが、お會ひしてみたらホンに好い人」と言はれたさうだ。阿々。未だオヤナにならないが、頭髪はだん／＼薄く、机上の仕事には近眼鏡をはづした方がラクになつた。 ○田中福雄(蠶二) 蠶業技師をやめて、恩給を取りながら味噌屋の番頭をして居る。縣下行徳の自宅から、本所郵便局前の山久味噌店(親戚)に通ひ、大勢の雇人を驅使してござる。味噌の御用があつたら御申越し下さい、又國技館の相撲見物に御出かけ下さいとある。 ○坂田得一(絲三) 縣下僻地の地にある自宅に久しく百姓をして居たが、ヤハリ月給取の方がよき

さうだとあつて、昨年の夏から蠶試の囑託にありつた。併し自分等の學生時代には習はなかつたセリブレン検査などに大分悩んで居るらしい。 ○上林多兵衛(蠶七) 蠶業技師で、原蠶種監督の重責を荷ひ着實にやつて居るので好評噴々である。田中、坂田と共に頭髪最も薄く、セリブレン式に一本並びになつて居る。 ○佐 瀬 旭(蠶六) 鐘紡精城工場の原料係で、千葉縣下に於ける特約組合を牛耳つて居る。研究心あり、官廳方面との連絡もよく、又商賣も上手で、社の内外に評判がよい。 ○竹内虎夫(蠶九) 印旛沼のほとりに、種屋を經營して居る。時代の波には逆はれず種屋商賣の儲からぬは何處も同じことであらうが、親爺の遺産のお蔭であまり離職せぬ所が頼もしい。令弟が千葉市内に寫眞屋を開業して居るので、此間の懇親會に實費を以て、記念撮影して貰つた。 ○新井宇之輔(蠶十五) 大網農學校の先生で、眞面目の、常識的な、模範教育者だ。専門學科の外球算を受持つて居ると云ふ。學校の温室で出來た、メロンや葡萄の饗應をして呉れるから、御通りすがりの節は御立寄り下さい。 ○櫻井英作(絲五) 縣商工水産課の主事補として漁業組合の監督と云ふ筋違ひの仕事をして居る。株式通で、この方面の話なら女より好きと云ふ變り者。 ○小林憲政(蠶十三) 久しくルンペン生活をして居たが、昨年來昭榮製絲に入つて、縣下城東町にある大乾燥場を預り、特約組合の仕事懸命にやつて居る。頭髪を止めず光輝いや増して神々しい。

京城通信

「お暖かて御座居ます」之が本年の朝鮮
而も一月の氣候に對する挨拶だなんて全
く以てあきれはたした變調子の氣候、お蔭
で石炭代は幾分助かつて居る事は確から
しいがその反面天然氷は採氷の運びに至
らず、氷饅頭を唱へられて居た先十四
日夜來より水銀柱は降り降つて一躍零
下二十度近くの下降を示し初めて嚴寒襲
來スケーターを活氣づけ氷屋薪炭屋を喜
ばせたと同時に亦温突酒を味ふ一黨を嬉
しがらせた事は疑ひない。而も絲價は六
〇〇圓臺に跳ね上り先づ以て幸先よし。

此期を逸しては在京畿道同窓生久方振
に顔を合せようと名目は新年會(全く舊
曆によつてやつて居る朝鮮ぢや解釋の仕
様によつては忘年會とも言へるが)と言
ふ事にして發案したのがチヨンガ一連中
それに拍車をかけた兩〇關(大關〇〇關)
の賛成の言葉そこで乗り出した常任幹事
二名曰く道廳沈氏蠶取補原氏。道く水原、
水登浦迄飛ばして意嚮を聞くに何
れも勇躍参加と言ふ返事、内地旅行中の
農學校堀先生のお歸りを待つと同時に着
々用意を整ふ。

場所は京城?流の暮久滿
時は 一月十九日夜
集る者は 蠶科:七名 絲科:五名
紡科:一名 特科:四名
他大勢

堀先生遂に歸城されず幹事沈氏母上の
急病にて手が離されず遺憾ながら欠席
X X X
六時半開會と言ふに六時には七七分出
席と云ふ状態以て如何に此種の催しが期
待されて居たかを御想像願ひ度い。六時
半が待ち來れぬ連中美しく處なんぞ揃はな
くても結構早く〜と幹事にせがむ。幹
事獨りにて天手古舞、雜務係に大石氏を

煩はす。今少し待つて貰はねば室が温ま
らぬと言ふのに何に梅はぬとばかりどや
〜と會場へ押出す有様。こんな連中見
た事はないと呆れて居る仲居やおかみの
顔を見目に寒い室に陣取つて幾分震へな
がら酒を待つ。燂番のうるたへた事は夥
しい。

料理より酒だ體の芯から温めるとばか
り膳も整はぬのにやり初める。何時だつ
てそうだが開會の挨拶なんてやつた事は
ない「よう」や「あ」から「やれ」呑んで初
まるんだ(こんな事を書くに如何にも吾
々が下品に見へるが内輪同志で何の遠慮
もなく常平生は氣兼ねながら酒席に連
なる面々だけにこんな時こそ一視同仁此處
に同窓會の意義があり同窓生の親しき氣
安さがあるんだ)。特科隊の美し處も三對
一の割合で出揃ひ膳も整ひ室も温まる頃
本山氏來場一足遅れて水原から馳け付け
て來られた山口、金雨氏。(牧野氏は前日
から京城に出て待ち受けて居られたんだ
と聞く)寒帯に暮して居る吾々體も仲々
温まらぬ。少々呑んだつて何ともこたへ
ぬ。見る〜中に燂瓶が空になる仲居の
一人は帳場と會場を廻り廻り専門に往來
して居る。唄も何もあつたもんぢやない
積る話の數々に美し處は取付く島もなく
一寸飽氣にとられた他人共、七時半べん
〜のべの字も未だ出ぬ、八時漸く酒が
體内に行渡つたらしい一同の様子、仲居
に耳打されて「何もう四本平均呑んでゐ
るつて。冗談ぢやないよ」と思ひつゝも
「かくなる上は止むを得ぬ流水止る處を
知らずゆき着く處迄ゆき」と腹を定め
た幹事。ぢやこゝらで例により寄書をと
差出せば酒を注ぎ込むと何か書き度くな

る兩〇關合點とばかり先づ筆を採つて下
さる。亦一しきり杯の往來。
その中に長老が正面で唄ひ出したと見
る間もあらず若い者がお林を奪つて一瞬
演藝の場面に早變り。信州で育つた吾々
だけに第二の故郷の空氣は懐しい。先づ
出るのは木曾節、どや〜と立上つた數
人陣を作つての木曾節り昔を思ひ出し
考へ〜踊る面々、出鱈目に動かす手足
に唄の方が合はせてゆく様もある。伊
那節に至つたら之亦物凄。とにかく木
曾節も伊那節もつまる處は體と手足を動
かして居ればそれでよい事になる。東京
音頭が出るかと思へば京城音頭が出る。
小原良節が出たかと思ふとおけき節りが
とび出す。一人がやり出す節りは全部が
眞似する。ヨイヨイヨイヤサだ。

取まきの(牧野)美し處の
金聲に
伊那節踊りは
俺が本山
X X X
酔亂が一人現はれた。今迄緊張の席は
かりに出て居たのが一遍に開放されて自
由の天地に羽ばたき學生氣分に戻つたら
しい若手だ。一人でがなり立てゝゐる騒
がしい程賑かだ。「あいつ罰金を取つてや
れ」と元老が幹事に私語。合點とノ一
トする幹事。騒ぎ初めは長老連だが騒ぎ
續けてゐるのはチヨンガ一連、どうして
もチヨンガ一税を取る必要があるらしい
之もノ一トに記入。

九時半全く亂戦!
呑むものは呑め、唄ふものは唄へ、踊らば
踊れだ。線香代も酒も豫算追加だが結局
腹の痛むのはヤンベン連中だ。チヨンガ
一税を出して堂々やつつるだぞドンチ
ヤン〜京城蠶界のヒカ一内藤さんは何
時もなら一番初めにしどい咽喉を開かせ
るんだがどんち騒ぎは苦手らしいどう
やら次の座敷を計畫して居る様だ。危険

危険!
長老の一人が立ち列車組が立つ。然か
し未だ止みそうにない感激のクライマツ
クス。美し處は呆れ返つて總退却、然ら
ば吾々もと立上つて街頭進出……
十九日は皆既月蝕の當夜月がいくつにも
見えたと言ふ不心得者が數人……
おめ尾見と何てこのまゝ
歸りやうか
京城よい處半島の都
X X X
普通の宴會は平均一人當り三、四本の
酒とか開くに何とまあ八本當りとは……
昨年の新年會は一人當り七本。一年の間に
よくまあこんなに腕が擧つたんだとび
つくりした幹事。會費割當に一苦勞だ。
小笠原、尾見の兩長老から本山、内藤、朴
均宅の中堅處由井、潮脇、補原、大石の
チヨンガ一連、牧野御大を中心とする都、
山口、金、の道征組とこう並べ立てると
こんなに揃つてゐる組は他にあまりない。
寒さに震えられると下戸も上戸に早變り
か。此の外に未だ豫備軍として堀、沈兩
氏が居たんだから何處へ出しても恥かし
くない集りだろ。

會の様子は之位にして置いて當夜拾つ
た會話をこゝに掲ぐ。朝鮮在住の同窓生
の方々が遠く千曲會本部の方々に熱誠し
て貰ひ度い。

「大體朝鮮には千曲會支會があるのか
ね」
「そりやあるよ。忠州に支會があつて
高橋善吾さんが支會長さ」
「何か朝鮮支會として仕事をして居る
のですか」
「やる事はあるだらうが結局出來んの
ぢやあるまいかね」
「各地の千曲會支會は相當發展し活躍
して居るのに七十名近くの會員を有する

朝鮮にあつて何の意見も本會に對して出
きぬなんて、何だか物足らぬ氣がします
ね」
「私は朝鮮へ來てから一度も朝鮮千曲
會としての相談も受けず各道間の連絡も
ない様に思はれますがね」
「七十名近くの同窓生を有する朝鮮支
會なら何か仕事もあり本會に對しての意
見もあると考へてゐますが」
「とにかく仕事をするには同窓生の多
數居る場所へ支會を持つてゆかねばなら
ぬだらうし支會長は結局公職にない人が
やるべきでせう」
「本會の人達は亦朝鮮全土を内地の一
縣位の大きさに考へてゐるんぢやないで
せうかね。廣過ぎて一寸仕事も出來ませ
んよ」
「どうしても各道に支會の支部を作つ
て連絡をとらねば駄目だよ」
「本會から支會宛にどんな事を言つて
來て居るんだらうか」
「そいつは吾々には判らない」
「何れにしてももう少し連絡を取つて
朝鮮支會としての意見を代議員を送つて
本會に對し吐くべきだと思はれます」
「註文は色々あるだらうがまあ黙つて
ゐるよ」……

左は當日の寄せ書を示す。
(十一、一二、バラ生)

寄せ書中央の漫画は美しく彩色さ
れてゐましたが普通の凸版では色
が出せぬのが残念です。(編輯子)

朝鮮にあつて何の意見も本會に對して出
きぬなんて、何だか物足らぬ氣がします
ね」
「私は朝鮮へ來てから一度も朝鮮千曲
會としての相談も受けず各道間の連絡も
ない様に思はれますがね」
「七十名近くの同窓生を有する朝鮮支
會なら何か仕事もあり本會に對しての意
見もあると考へてゐますが」
「とにかく仕事をするには同窓生の多
數居る場所へ支會を持つてゆかねばなら
ぬだらうし支會長は結局公職にない人が
やるべきでせう」
「本會の人達は亦朝鮮全土を内地の一
縣位の大きさに考へてゐるんぢやないで
せうかね。廣過ぎて一寸仕事も出來ませ
んよ」
「どうしても各道に支會の支部を作つ
て連絡をとらねば駄目だよ」
「本會から支會宛にどんな事を言つて
來て居るんだらうか」
「そいつは吾々には判らない」
「何れにしてももう少し連絡を取つて
朝鮮支會としての意見を代議員を送つて
本會に對し吐くべきだと思はれます」
「註文は色々あるだらうがまあ黙つて
ゐるよ」……



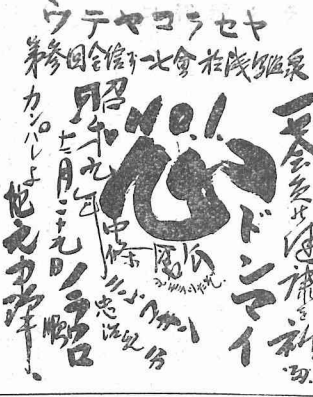
左は當日の寄せ書を示す。
(十一、一二、バラ生)

一七會の集ひ

利三朗

十二月二十九日 此の日信州では吾々養蠶一七回卒業生よりなる全信州一七會なる集りが催される。此の集りも賑々の聲を擧げてから満三才になる。そして毎年必ず年の暮の二十九日には信州の何處かで開かれており而も確實な繼續性を持つて今日に及んでゐる。會員は長野縣在住者で北信に五名南信に八名あり全國一七會員の三分の一を占めてゐる。尙昨年春からは一七會の本部は當分松本市に置かれる様になつたので此の集りも愈會本來の目的の達成を期する爲めには今後有形的な活躍をも積極的に行ふの重大責務を擔ふに至つたのである。

茲に千曲時報を通じて會員各位に本會の存在の事實をお知らせすると同時に本會今後の發展の爲めには何かとお力添えある様懇願する次第である。



第三回の集ひは昨年暮、定日午後一時より淺間温泉で催された。此日は昨夜來のサラ／＼小雪が入念に夜を徹して降り晝頃には一尺二、三寸も積つたらう。そして空模様はまだ中々霽れそうもなかつた。信州では此の冬は雪飢饉ではなからうかと縣下二、三スキー場等では神官に依頼し雨乞ひならぬ雪乞ひをやつたとかいふ珍談をさえ耳にした程だつたのに、此の初雪而も此の地方突然の大雪には吃驚した者が多かつたらう。

集つた面々は中條先生、倉澤、岡原君橋本、ドンマイこと宮堀、西澤、そして僕、妻子同伴で休暇歸國中の中條君が此の會に加はつたことは會員をして妙からず喜ばした。

會は約十時間の豫定だつた。一年一回の集りとしては餘りに短かく限られた時間であつたが例によつて會の劈頭協議問題が提出され、各自はそれ／＼問題に對し意見の交換を行つた。

これが終るとお五年末自由になつた身だ、時間一パイに温泉氣分に浸らうといふので思ひ／＼にお湯に飛び込んだ。片やクラスメイトとして、又非常時蠶界人として師を懐ひ、友を語り、蠶界の現状を論じ將來に及んで話は次から次へと擴がつてゆく。機をみて幹事君美妓を待たせ杯を廻せば一同の氣分はサツト轉換して話題亦轉じ、家庭生活さてはPの方面に迄延びて和氣爆笑外にあふれ、意氣や將に天を衝くの感あり、僕は心の深くに言葉や筆には表し得ないモノを刻みつけられた。

午後八時乾杯——母校恩師並びに一七會員の健康を祈る。兎角情み合つた様な環境に働くお互の身にして此の和やかな集りを誰が敢て散じやうと言へやうか。地元の誰かが感激に満ちた面姿で言つた。

「皆の衆一年に一回のことだ、今少し附き合つて呉れる」「ヨシ」異口同音、それから十五分位は経過してゐたかも知れない。一同は松本へ車をとばせてゐた。そして毎年來て呉れた北條、西原、金澤及び酒井の四君が止む得ない事情の爲め缺席された事などに心を寄せ合ひつ

つ第二次會が始められてゐた。スピードアップを強られた型の集ひには皆熱心と努力が必要であつた。その故かお互ひは二次會頃には身心ともに可成り疲勞を覺えた様子だつた。それにしても座の各所に火花散る談論、自論を否定されて聲を一段と張上げる場面は他から

見れば正しく喧嘩口論としか見えなかつたらう。誠に珍らしい宴會だつた。會齋なる頃だつた。蠶界に於ておつき合ひの最も多いといふ松本に働くK君は此處(料亭)へはチョコ／＼顔をみせるのか、獨りて末座の方で其處にあるY子とかいふのを興奮せしめてゐた。

彼女は僕等を眞面目なそして理智的な?眼指してジツト見入つたと云ふ面持ちでK君の言葉に參つてゐるらしいのが觀えた。他の君等は此狀を氣附きしや知らず、僕は此の神聖なるべき席上に於て吾々に對する地元K君の態度には嫉妬にあらず憎悪を感じてその穢らはしさを胸にこみ上げずにはおられなかつた。

K君の文句が餘程胸に響いたらしい。彼女の容赦ひには元氣がなかつた。異様な落付きと静けさを以て徳利を動かしてゐた興奮した。僕は突然その女の膝近くあぐらしてその不景氣面を攻撃した。彼女は瞬間この僕の見事に吃驚した様子だつた。併し次にはキリツト僕を睨みつけた型で言つた。

訃報

御逝去通知

左記會員御逝去せらる。謹んで哀悼の意を表す

井上泰利君(絲十九) 昭和九年十二月二十二日御逝去 諏訪郡平野村 嚴父 井上 五郎

小林實一君(蠶十五) 昭和九年十二月二十五日御逝去 北佐久郡中津村鹽名田 令兄 小林 藤樹

中會根誠一君(絲廿一) 昭和十年一月四日御逝去 群馬縣新田郡太田町 嚴父 中會根都太郎

馬場政友君(絲十) 昭和十年一月十三日御逝去 小縣郡鹽尻村上六七 令兄 馬場 守正 一子昭

佐藤彰二君(蠶九) 昭和十年一月十四日御逝去 小縣郡鹽尻村大字上鹽尻 嚴父 佐藤善右衛門

品川末夫君(紡九) 昭和十年一月二十二日御逝去 島根縣邑智郡口羽村 嚴父 品川 夏市



故馬場政友君(蠶一) 御遺族よりの禮狀

仙場秀次郎君(蠶一) 昭和十年二月一日御逝去 東京市赤坂區青山南町 五丁目八十四番地 令兄 仙場 東太郎

故馬場政友君(蠶一) 御遺族よりの禮狀

拜啓亡父政友君の御訃報を承り、御重なる御弔詞を賜り厚く御禮申上候、生前一方ならぬ御厚情を蒙り候も御恩の萬一をも御返し申し得ず相果て候段誠に慚愧にたへず候、今後必ず私共にて御恩返し致し度き覺悟に御座候、右旨略儀以書中御禮申上候 昭和十年一月十九日 男 馬場 守正 一子昭 妻 馬場 正 一子昭 兄 馬場 守正 一子昭 弟 馬場 守正 一子昭

故佐藤彰二君(蠶九) 御遺族よりの禮狀

謹啓今回嗣子彰二君別式之際、嚴寒ノ砌遠路御弔問ヲ賜リ且御鄭重ナル御贈贈ヲ辱ウシ御芳情ノ程難有奉感謝候、先ハ不取敢以書中御禮申上度如斯御座候 敬具 昭和十年一月十九日 佐藤 善右衛門

弔慰金募集

本會々員 故佐藤 愛之君(蠶九) 故井上 泰 利君(絲九) 故小林 實一君(蠶十五) 故中會根 誠一君(絲廿一) 故馬場 政友君(絲十) 故佐藤 彰二君(蠶九) 故品川 末夫君(紡九) 故仙場 秀次郎君(蠶一)

弔慰金募集

右記諸君に對する弔慰金を募集致します。佐藤愛之君は三月末日迄、其他の諸君は四月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致し度いと思ひますから夫れに間に合ふ様振替口座東京第四三三四一番へ夫々同君弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。 昭和十年二月十五日 上田蠶絲専門學校千曲會

弔慰金報告

- 故鈴木貞治君弔慰金第四回
 - 金壹圓也 中川 博司 栗原 章
 - 右合計金五圓也
 - 累計金四拾九圓也
- 故松田敏三君弔慰金第四回
 - 金壹圓也 文平 一志 藏人 豊部 正巳
 - 遺藤 文平 一志 藏人 豊部 正巳
 - 松村 季美 手塚芳太郎 高木 三治
 - 金壹圓也
 - 篠原 善次 須田國之助 石川 健丸
 - 酒井 末吉 森 淳太郎
 - 右合計金貳拾圓也
 - 累計金參拾參圓也
- 故佐藤愛之君弔慰金第一回
 - 金貳圓也 高木 三治 竹内 虎夫
 - 金壹圓也 四方 定雄 後藤 仙彌 門平潤一郎
 - 右合計金七圓也
- 故馬場政友君弔慰金第一回
 - 金貳圓也 森田 三郎 須田國之助
 - 金壹圓也 横山 英一
 - 右合計金五圓也
- 故中會根誠一君弔慰金第一回
 - 金壹圓也 横山 英一 村田 階宣 駒井 慶治
 - 丸山 勳 武藤 寛一 吉田 榮治
 - 右合計金六圓也
- 故佐藤彰二君弔慰金第一回
 - 金壹圓也 四方 定雄
 - 右合計金壹圓也
- 故小林貫一君弔慰金第一回
 - 金參圓 石附 文吾 池田 善三 渡邊 晋吉
 - 西本 朝平 片山 次男 川上興三郎
 - 中村 岩人 山下 忠雄 山本 誠
 - 山本友之丞 降旗 孝 小山 恵治
 - 小林 重雄 兒玉 信尊 阿部茂一郎
 - 阿部 丈夫 新井宇之輔 淺野 清志
 - 齋藤 幸藏 櫻井 弘吉 笹本 保雄
 - 清家 重明 宮本 豊彦 宮崎 秋雄
 - 遠藤 正壽 平野 秀男 森戸 晋
 - 鈴木 雄七 (以上十五會員)
 - 金貳圓也 古越 光明 出浦 長 岡本 榮一
 - 井澤 喜三 今村 良郷
 - 飯島 正胤 小川 茂 千葉 達人
 - 野口 活也 鈴木 玄九 角替 起夫
 - 三輪 貞徳 宮本 清松 宮川 繁治
 - 大石 唯男 田口 亮平 高瀬 毅一
 - 大崎 征内 桐澤 富雄 藤本衛佐雄
 - 若林 孝三 阪本 政雄 木内 茂雄
 - 竹内 孝一 松本 一二
 - 金五拾錢也 中會根長男
 - 右合計金百拾四圓五拾錢也
- 故井熊虎太郎君弔慰金第四回
 - 金參圓也 森田 三郎
 - 金壹圓也 須田國之助
 - 右合計金四圓也
 - 累計金八圓也



井上泰利君を憶ふ

林 清 市

舊曆二十二日井上泰利君逝去さるるとの報に接し頑健なる体軀の持主であつた丈に唯夢の様には思はれてならない。昨秋來胃腸を少し潰して居る様に聞いて居たが其處へ風邪を引かれ無理に無理を重ねられた結果、急性の肺炎にて前途に幾多の抱負を抱きながら遂に歸せられたのである。井上君は諏訪郡平野村の名望家井上家の出、諏訪中學を経て製絲科第十九回の卒業である。在學中はスポーツを最も得意とし、山紫水明の山岳地帯に育れた

丈あつて四圍の連山に足跡を残さざる所なく、又運動場裡にあつては野球に、競技に、常に勝者であり其の動作たるや生氣が横溢して居るのであつた。又一度机に向へば如何に難解の宿題と雖も一夜の中に簡単に解いて何時も悠々たるものであつた。又君の性質は豪放磊落然も活脱たる氣質は接するもの虚心坦懐ならざるを得なかつた。昭和七年春學窓を出られると君は直に岐阜の片倉工場に入社された。丁度前年同工場に實習に行かれたので入社早々其の力行敏腕は物凄く機械改良や繰糸法改善に専念され其の業績たるや上下を擧げて興望を一身に聚めたのである。翌年松江工場長に懇望されて松江工場に轉勤された。其處に於ける君の活躍は實にすばらしく現業成績は駿馬の如くはね上り理想に向つて一日と改善され、又業手の敬慕は肉親にも勝り皆君を憧憬して工場内は全く君の采配下に置かれたのであるが其の意氣にさすがの現業主任も懷疑心を生じ遂に意見を異にして在勤數ヶ月にして熊本の工場に行かれた。去るに際しては全員涙を以て之を送り然も幾多の留任運動が行はれたのであつたが惜まれつゝ轉勤されたのである。幾何も無くして山陰の江津工場にて工場改造を爲すに及び再び迎へられ其の監督に當つたのであるが偶々病魔の犯す所となり工場完成後數日を出でずして遂に永眠されたので誠に哀惜に堪へない次第である。悲しくも人生の半ば在世二十有四年にして既に不歸の客となる。今や君の風貌に接する事も出来ず又ユーモラスな語調を帯びた聲を聞く事も出来ない。君の前途こそ其の將來を囑望せられたるに此の非常時に他界せられたのは同窓としても社會としても實に惜みて餘りある所である。此處に短文を草し君が英靈の安らかならん事を祈る次第である。

貫ちゃんを憶ふ

阿部 茂 一郎

貫ちゃん！ 阿部 茂 一郎
冷たく大地に氷りついた墓標に取絶つて斯う呼び續けたい。然し千里の外にある私に取つては、遠い臺北の地から君が郷里佐久の中津村へ、南から北へ、暑い處から寒い國へ、一瞬にして去つた流れ星の行く先を辿る様に君が幻影を淺間嶺に追ふてありし日の君を追憶し得るのみである。

上田生活三年の間常に貫ちゃんと同僚から親しまれた君は、卒業後六有半年の間も、終始同窓一五會員の中心になり『ぼしん』の發刊やら其他いろいろ面倒を見續けてくれ、吾々同期生のヒカ一であり稀に見る逸材であつた。學校を卒業して翌々年宿望を抱いて臺北帝大理農學部へ進み、大成の一步に踏入ると間もなく勝チアスに罹り、病床上に呻吟すること幾日、やうやく健康を恢復し勉學の傍、保險の勧誘員に、或は家庭教師に幾多苦闘を續けられて早くも螢雪の効を遂げ、母校並に臺北中央研究所農學部に職を奉ずること僅かに一有半年、此の間斯界に貢献する處頗る多く君が今後の活躍を期待したるに天命君に歳を藉さず不啼の客となる。噫。

願れば今から丁度五年前、私が朝鮮入をしようとする頃、「貫ちゃん」は絹絲化學教室南方の二階建素人下宿に遠大な希望に燃えて、受験準備に寧日なかつたのだ。隙間から寒風が崩れた膝に吹き荒れて鳥肌になつた膝頭を、さすつては参考書を繰る君が姿を見て同情の念を禁ずることが出来なかつた。其れから早速土地の織物で家内に丹前を造らせ「さぞ寒いぞう。粗末なものですが纏つて下さい」と郵送した處其の返禮に、故樋口先生の遺著「日本桑樹栽培論」に「可愛い、慶子の誕生を祝ふ。小林貫一」と、君が性

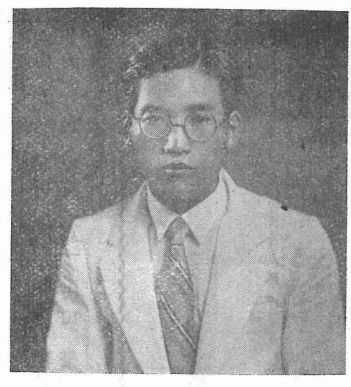
格を彷彿せしむる筆蹟のせられてあつた。其の巻頭には恩師樋口先生の肖像があり、貫ちゃんから誕生を祝はれた私の長女慶子は渡鮮した年の八月世を去つてしまひ、今又記念せんとした君が又こゝに記念せられんとしつゝある。其れから昨年十一月十三日臺北からの便りに「阿部君御便り有難う。仰せよると北鮮は大分寒い様ですね。朝鮮邊りで寒さに縮んでゐると時代遅れになりやしないかと案じられるがどうかね。僕なんかまだ夏のワイシャツ一枚で上衣も着ないで出勤してゐる。それから一五會員の様なものを作つても駄目らしい。第一金が集らない。第二世話をする奴がない。皆理想や計畫は大きなことを云ふて寄越すが誰かやるだらう位に思つて、自分で皆の意見を聞いて自分でやつてやらうと云ふ勇氣のある奴は一人も居ない。驚くべきは毎年少くも一―二回は葉書を出すのであるが返事をくれる奴は大體半数である。こんな調子だつたらばしんなんかも金がなくなり音信が少なければ廢刊するより仕方がない(以下略、原文の儘)。母校廿五周年祝賀を機會に何か一五會として記念事業をしようと思ふ照會に對して、各所から夫々名案を申出した結果を斯う結論づけてゐた君の便りには、意外な感に打たれざるを得なかつた。然し日々多忙な學究に全生命を傾注してゐながらも、斯く吾々の爲に寸暇を利用して盡力下さつた君に取つては、さもあるべきこと、肯定し誰か外に御盡力を願はねばなるまいとは誰しも考へ及ぶ處であるが、よもや斯くあえない最後にならうとは夢にも。

今は亡き臺北中央研究所農學部小林貫一君宛の年賀狀は、主なき机上に山積されたことだらう。

末尾に一句を物して君が靈を弔ふ。
淺間嶺の雲皆石と氷るべし
(一〇、一、五)

小林貫一兄の追憶

田中 亮



人類文化の發達の歴史に吾々は屢遭する事であるが、若くして逝いて尙拔群の足跡を残した天才を短命にして亡び去つた天の無情をうらまらずにはおられない。あゝ又々今日生々しい現實の事實と

して、この痛ましい悲劇に衝突しやうとは。兄の最後の活動舞臺であつた中央研究所農業部應用動物科の玄關前に於ける素朴の中にも嚴肅なりし告別式に於ける素木科長の涙の告別の挨拶はこの悲劇の適切な表現であつた。

筆者は故人より一年遅れて渡臺して同じ學舎に同じ理想を抱いて學び、語り且つは歩んだ。そして最後の日兄の發病と同時に之を運んで介抱し、苦しむなしくして遂に呼吸を引取る迄兄の顔を凝視し續けた。故人の追憶の纏まつた冊子が多分上田の方からも出るであらうし、又吾々生物學科の同窓生からも作製する事になつてゐるから此處では取敢へず兄の臺灣に於ける奮闘史を概記する。

昭和五年四月小林兄が渡臺して見事に臺大パスの快報を上田に打電した時の兄の喜悅は文字通り手の舞ひ足の踏む所を知らずの形容で盡きなかつたであらう。これが草分けとなつて本大學の理農學部に上田の名を印象付けしむる様になつたのである。尤も其の第一の原因はその前に上田の若き科學の闘士小泉清明助教授が臺大に奉職されて居て、當時母校の生

物學教室にその餘りにも物々たる學問的氣概と知識欲に燃へて居た兄の臺大入學を勧められた。奮起した兄は極度の眞剣と得意の能率を以つて受験準備を初めたが、その時即ち試験迄僅かに二三ヶ月を餘すのみだつた。血を吐く思ひで頑張り續け、がんば／＼した頭を押へ／＼して遂に成功した。實に驚くべき底力を持つて居たのである。

かくて赫々たる希望に充ちた大學生活が初つた。その生活は上田の時に劣らず最低の消費を以つてし、最高の能率を以つて知識を獲得して行つた。筆者が初めて兄の下宿を訪れた時は、玄關口をどぎした様な粗末の三疊の部屋で、二三十錢で買つたと自稱する文札の足の下に臺をして孜孜として勉強して居た兄の姿は寧ろいぢらしいものであつた。運命は過酷にもその年の冬兄をチブスにさせてしまつた。學費を稼ぎながら人一倍勉強した兄の身體が弱つて居た故であらう。所が驚くべき事に約一ヶ月入院してゐながらも、他の學生に劣らず實驗を仕上げ、尚且つ快癒退院して充分恢復しきらない病後の體を以つて人よりも多くの科目單位にパスしてしまつた。この時非常に心配されたのは小泉助教授であつた。無理をしなければならぬ時は何處迄も頑張りて仕舞ふ信州人の典型的特質を備へて居たのだ。

幸ひの事にはその後身體が強健となり愈々拍車をかけて刻苦勉勵し、自然が示す大道を開拓すべく邁進した。恰も質量の大なる物體に加速度がついて運動量が愈々大となる状態に比せられた。昭和七年々頭の感としての兄の一文はよく當時の心境を物語るものである。

「自然は裸體となつて吾々の觀察研究を待つてゐる。先人の開拓せる道は汗臭し。吾人は自ら進むべき道を創造せなければならぬ。力あるものは如何なる道を探しても進み得るに堂々たる大道に立ちし我よ。自重自愛して何處迄も永久不斷の

勉強をせられよ。昭和七年壬申一月一日標高一千七十米の大屯山より歸りて所感である。當年二十六才、小林貫一」

人間小林としての人となり既に上田で知られてゐる様にその周囲の人々に厚い情誼を示し、又圓満の常識を備へてよく指導し全く立派な人情家であると云はねばならない。その反面に長上者に對しても自己の立場の損得を省みず、自己の意見の主張を露骨を表現する氣概があつた。昭和八年々頭の所感を次に記す。

「黙つて然し怠らず勉強して呉れ給へ。不平は自己の無能を物語るものだ。知識は一晩に得られる。金は即刻手に入る事が出来る。而して健康と友情とは永久不斷の努力に依らざれば得ることが出来ない。昭和八年々頭所感 小林貫一書」

小林兄は家庭の事は餘り口にしなかつた。大學三年目の夏九州福岡遠探集旅行に行きながら何故信州迄歸らなかつたのだからか。その理由に就いては「歸つても仕方ない」位の返事でその心事は多くを語らなかつた。恐らく誰にも語らなかつたであらう。其處に何か深い悲痛の決意があつたのだから。それを今想ひ起すと筆者のみならず誰かが暗然とせずにはをられない。故郷の親兄弟の方々や母校の恩師に遂に其の儘永遠の告別をしなればならなかつた。

大學卒業後直に中央研究所の應用動物科に就職して將來専門家として立つべき昆蟲心理學生態學に鋭意突進した姿は實に目覺しいものだつた。この分野は小泉助教授の推薦に依るものであつて大いにその大成を望まされ、この人なら比較的未開發のこの學問を必ず完成するであらうと考へられたのであつた。かくして破竹の勢で一人前の學者としての生活のスタートを切つた。兄の僅か二年間に讀了した文獻の数は莫大なものであつた。實に赫々たるスタートであつた。既に二、三

まとまつた論文が出版され又は出版され様としてゐた。この時に突然倒れてしまつたのである。残る人達は唯唯然として言葉がない。

九年十二月二十五日この日は三日にわたつて開催された日本學術協會第十回大會の最後の日である。當日は多少蒸暑い日であつた。午前の日程は悉く済んで午後一時講演が再開された。第三部A(生物學)會場へ稍々遅れて聴講に這入つて來た小林兄は平生と殆んど變りない元氣の顔であつた。それが座について暫くするや死の魔の手が突然侵ひかゝつたのだ。急に手足を伸ばし痙攣し呻めき聲を發して人事不省となつた。直ちに附近の室に運びこまれて應急手當の甲斐もなく約十分の後亡骸となつてしまつた。丁度その發病と殆んど時を同じふして北大の前川博士がA會場より少し離れた同一建物のC會場(醫學)の廊下を歩行中突然發病され、人事不省となつた。會場は大騒となり警察當局も重大と見て檢視に來たが全然外的原因として認められるものな(例へばガス充満、漏電等)小林兄は突然の心臓麻痺の發作と診斷される以外何者も不明であると醫者は話して居た。前川氏は腦震盪であつて一命は取止めた。

小林兄は必要の時徹底的に頑張るが平生は人一倍健康に留意し、最近もいつもと變りない健康體であつたと考へられるし、又生來心臓が弱いとも聞いておらなかつたので結局は短命たる宿命をかこつより仕方ないであらう。近頃趣味に凝る様になつて役場で日暇を見ては甚を熱心に園んだ事等は可なり的心境の變化と云はざるを得ない。遺品整理の際氣付いた事だが一切が非常によく整理がついており、これは兄の端正の性格を良く反映して益々情別の情に耐へない。兄の死の直前迄の心理を推察すると、母校の恩師に大いに將來を囑望されて物質的に又精神的に相當の恩恵を蒙り、それに對して必ずや大成して報恩しなければならぬ責任感を常に抱いて物質的のあらゆる苦痛を忍んで刻苦勉勵し續けて來た心境は全

く悲壯のものであつた。然るに何等遺言の暇なく最後の實を結ばずに長逝しようとは誰が豫想し得やうか。唯命の許す限り飽く迄勉強し續けて來た事に對しては地下の靈は満足して居るだらう。

翌日應用動物科の玄關前で告別式が行はれた。豫想以上の多數の弔慰者に吾々は心から感謝した。一月一日には郷里の次兄義重氏が敢へなく臺灣の地に白骨と化した弟の遺骨を受取りに遙々來臺された。そして八年振りで會つた弟の學者らしい發刺たる姿の寫眞を眺めて熱い涙に咽んで居られた。死んで最初に注がれた肉親の涙であつた。義重氏の談に依ると郷里の家族の人達には明かに貫一氏の死の豫感があつたそである。

擱筆に當り志半ばに倒れた小林貫一兄の靈の安らかな冥福を心から祈る次第である。(一月六日記)

小林貫一君を憶ふ

(十五會) 小山 惠治

畏友小林貫一君(養蠶十五回)には舊臘廿五日臺北大に於いて折柄開催中の日本學術講演會の席上心臓麻痺にて急逝せらる。君を知るもの聞くものをして愕然色を失ひ眞に呆然自失たらしめたるも宜なる哉。君生を北佐久郡中津村鹽名田に受け野澤中學より上田蠶專に學び卒つて母校の助手として在職二ヶ年、更に進んで臺北大理農學部に在る事三ヶ年、卒業後同大學に止り専心斯學の研鑽に没頭せられ、日ならずして業績を抜き其眞價を現さんとしつゝありしに實に權花一朝の夢廿八歳を一期として夭折せられたるは返す／＼も痛惜哀悼の極みなり。君の堅忍努力振りたるや實に驚くの外なくナボレオンは一日よく二、三時間の睡眠時間にて足れりとなせり。彼も人なり我も人なり、敢て駄眠を貪るべからずとは上田蠶專時代屢々口に亦實行せられたる處なり。君は在學三ヶ年間始終東京に頑張り一

着の學生服を以て終始し和服を用ひて寛
 きたる事等殆どなく如何なる嚴寒の候と
 雖も防寒具を用ひず足袋を穿ちたる事な
 く、孜孜として勉學を續けられたるにも
 か、はらばら一週一回の欠課すらな
 く頗る健康なりしは平常一身の健康に對
 して深甚の注意と自愛を以てせし事偶々
 同級會誌上に寄せる生活の二條件と題せ
 る次の記事に依つても窺ひ得らる。

「自分の生活は規律ある事を第一條件と
 する。夜ふかしをせぬ事、酒を飲まぬ事
 煙草を吸はぬ事、夜ふかし、飲酒、喫煙
 の後にはよい考へが出るかも知れないが
 偏見となる恐れがあるからだ。第二條件
 は健康に氣を附ける事不健康な病身者
 の研究は悲觀的乃至破壞的の意見に傾き
 はしないかと思ふからだ」

斯く人並以上健康の保持者たりし君が
 突然の夭折、察するに何事も遂げずんば
 止めざる資性、即ち過度の勉學こそその
 起因にては非ざりしか、嗚呼實に君は學
 界の犠牲者として此世を去れるなり。さ
 ればこそ君の訃報と同時に一躍中央研究
 所技手に任官を見たる決して故なきに非
 ざるなり。

蠶專の卒業期迫るや家人君に送るに洋
 服代數十金を以てす。君その命に従はず
 書籍の資となす。時に歸省するや老祖母
 直ちにその非を質す。君の曰く、「農人
 耕すに勞働服(粗衣)を以てす。我亦勉學
 するに何ぞ美衣を纏ふの要あらんや」と。
 明朝寒爾として敷を乞へりとは一月十二
 日正午小林君の郷里に遺骨を迎へし、折
 山積まれたる藏書の遺品を前にしての家
 人の涙の物語りなり。君が謹朴なる此一
 事を以てしても推し得るなり。

更に君の情愛濃やかなる事東寮附近の
 子供等貫ちゃん(と放課後の君を擁し
 つゝ嬉々として迎へたる今尙筆者の記憶
 に新なるものあり。級友に對する厚情篤
 實亦然り、我等十五會の今日の統制ある
 君に負ふ處多く君の悲報を級友に送るや
 即刻一人残らず余に寄するに哀悼長恨情

然たるものあり。將又飲仰追慕の狀惻隱
 たり。叙上の如く知、情、意、何れの方面
 より見るも一點の非なき人格者にして將
 來ある君を失ひたるは如何に命なりとは
 云へ真に感慨無量、悲痛亦之に比すべき
 もなし。君の訃を知るや期せずして一
 致したる級友の念願より同君の思出編輯
 をなし、一は以て君を偲び一は以て君の
 英靈を慰めんと企圖せられつゝある亦故
 なしとせず。

噫小林貫一君

小林 重 男

吾等のクラス雜誌「ぼしん」第一號の冒
 頭貫ちゃん(貫一君と言ふより貫ちゃん
 と言つた方が親しみが深く故人を追憶す
 るにこの方が何んとなく思出が多い)が
 次の様なことを書いた事がある。題は「十
 五會員よ、死を覺悟せよ」としてあつて
 信毎に書いてあつた「皆死ね、皆死ね、死
 んてこそ、死ぬ覺悟でこそ、吾等の活路
 を生きる道が開かれるのである、口舌の
 徒よ、誰か一人でも死に得るか」との一
 文を引用しクラスメートに激勵して曰く
 「實際死を覺悟した人々に依つてのみ最
 後の勝利が得られるのである、本當に生
 きんと欲するもののみが笑つて死を辭せ
 んのである、十五會員よ！私達の各自が
 命懸けの勉強！命懸けの努力！に依つて
 のみ自己を生み出しやがて若き立派な技
 術官學者政治家資本家教育家が爾後の荷
 の様に輩出するのである」と書いてある。

この一文を書いて終始自分自身がこれ
 を眞面目に平直に實行し生來の天分を短
 期間の内に發揮し遂に職務の爲め學術の
 爲めに殉じた。

貫ちゃんの中學時代、上田の五年、臺北の
 五年は實に血の出る様な奮闘努力其者で
 あつた。今將其實を結ばんとするときは
 急逝を聞いて茫然自失せざるを得ない。
 貫ちゃんは佐久高原の中心北佐久郡中

津村羅名田に呱呱の聲を擧げ幼少にして
 父を失ひ母兄の手により野澤中學、上田
 の學校と進んだのであつた。上田では三
 年間東寮に頑張り小倉の洋服で通學して
 居た。たしか此の當時は小倉の冬服を着
 て居る生徒は一人も居らなかつた様に覺
 えて居る。三年間殆んど郷里の羅名田へ
 は歸つた事はなく、もしも歸る様な事件
 の出来た時は大抵七里の道をテクトツて歸
 つて行つた。暑中休暇でも學校に残つて
 先生達の助手をしたり自分で好きな實驗
 に餘念がなかつた。在學中も卒業後も絶
 對に酒煙草はやらなかつた。宴會の席に
 出た時には一滴の酒も飲まずに酔拂つた
 連中と面白く話をしたり亂酔の後始末ま
 て嫌な顔もせず世話をしたりして居た。

臺大三年の時であつた。夏大學の葉木
 教授と共に昆蟲採集の爲め沖繩から九州
 に来たことがあつた。前以つて通知があ
 つたので八月一日熊本驛へ出迎へた。來
 年は理學士と言ふのだから多少肩で風を
 切つて歩くだらうと思ひの外、何時も相
 變らずの貫ちゃんを發見した時は嬉しか
 かつた。顔色は稍臺灣色に變つては居たが
 心持は少しも變らなかつた。一週間ばか
 り同じ蚊帳の中で寝て貫ちゃんの臺北生
 活の述懐談を聞いた。臺北に於ける苦學
 振りは想像以上で今回も死線を越えた話
 家庭教師の話、四疊の玄關で蚊帳を吊ら
 ずに寝た話、腸チアスで寝た話、自分の
 専門の昆蟲分類及生體の話と言ふ様に話
 は何時になつても盡きなかつた。

臺灣で生物學研究の有利なる點を述べ
 て、一生臺灣で暮すんだと言つて不景氣
 な信州へは歸らうと思はず又漂然と臺北
 へ歸つて行つた。思へば昭和七年八月十
 日午前四時卅八分熊本驛發の門司行急行
 の窓で別れの言葉を交し互に握手したの
 が永久の別れであつた。思ひ出せば思ひ
 出す程泉の様に追憶は湧いて盡きない。

彼の意氣と勉強振りがらしても未來の
 理學博士はもう既に約束づけられて居た
 様な氣がする。

貫ちゃんの急逝は信じ難くしても信じ
 られない。四圍の状況から無理矢理に自
 分の心を信じさせ様とするが其努力は無
 駄だ。

涙ながらに貫ちゃんの冥福を祈り筆を
 擱く。(一月廿七日告別式が羅名田で行
 はれる日に際して)

故小林貫一君を送る

君の故郷は舊中仙道、名ある宿場の一
 つ北佐久、中津村羅名田の郷である。さ
 しもの千曲川も此の邊はまだホンの上流
 で小川である。一月二十七日。此の日快
 晴なりしも、淺間威の遮るものもなく身
 にしみて冷たい冬の日であつた。

未だ花開き實も結ばざるに先立つて忽
 焉として散去つた名花一輪、故小林貫一
 君の葬式は君の村の寺院に於ていと莊
 嚴に施行された。左程に大きい境内では
 ないが、數多の會葬者と、同郷の君の死
 を悼み惜み形意を表さんとする村人の群
 て立錫の餘地もなかつた。

寺の正面に据えられた佛壇は各方面か
 ら贈られた花輪や、燈籠や供物で埋めら
 れ、その中央上段には大きく引伸され
 た君の臺北時代の白服の英姿が一段高く
 安置された。君の在りし日の佛も彷彿と
 して偲ばれて來る。

寔に之れ智仁勇兼備の相貌といはんか。
 誠譽之道貫通居士 享年廿八歳
 葬儀は僧侶の禮葬に續いて弔辭に始まる
 上田蠶絲專門學校長(遠藤教授代)、千
 曲會代表(浦生理事長)、十五會(同級會)
 代表(小山恵治君)、村長、親戚等の弔辭
 朗讀があつた。何れも眞情の發露に他な
 らざるはなく形式的のもの、片影だに認
 め得なかつた。他に數十通の弔電も披露
 された。親戚側の人達の嗚咽と共に吾々
 も又涙禁するを得なかつた。弔辭終つて
 御令兄より悲痛にして眞情のこもつた謝
 辭あり、續いて嚴肅な僧侶の讀經に會葬
 者一同心の合掌をなす最後に一同焼香あ
 つて式は終る。尙記念の撮影があつた。

ある。以來實にそれ以來數星霜、君は故
 郷への憶れも多分にあつたらうにもか、
 はらず、一度も内地の土を踏まず一憲學
 術の殿堂に精進されたのである。そして
 倒れて遂に止むだ殉學の勇士であつた。
 噫。因に千曲會員にして本葬儀に參會せ
 られた者次の諸氏である。

長男誠一急逝の概要

一、本人は昨昭和九年三月上田蠶絲専門
 學校卒業
 一、同年四月始より昭榮製絲株式會社
 (安田系の會社)に就職同社栃木縣小山
 工場に勤務
 一、同年六月徴兵検査にて歸省乙種合格
 (近視眼)第一補充兵に當籤
 一、同年十月小山工場の現業長高橋氏が
 同社岩手縣一ノ關工場に轉任のため抜
 んでられて一ノ關工場に轉任
 一、同年十二月八日午前八時誠一等の起
 臥せる同工場事務室階上に小失火あり
 原因不明(漏電か)なるも誠一にも責任
 あり、右火災の損失は保險にて償はれ
 會社には格別のことなく直ちに復舊、
 操業も二時間休止せるのみ、誠一等同
 所に寄宿の者は出勤の着物のみにて他
 は焼失

一、十二月末年賀郵便等は自身にて處理
 二十八日附にて家庭に來信極めて朗か
 の内容、失火のことは通知せず別に小
 包にて純絹製の日の丸の國旗、絹ハン
 カチ、網靴下等を送り又始めてポナ
 スを貰ひし故末弟へ贈るなど若干の好
 意を寄せ来る、日の丸は歸省出來ぬ故
 身代りなり、元旦より掲げられたしと
 書き添ふ、國旗は元旦に間に合ふ
 一、十二月二十九日頃感冒に犯され急性
 肺炎に進みたるらしく一ノ關工場亦三
 十一日迄操業新年一月二日及び三日
 なるため三十九度の熱を押し出出勤三
 十一日迄働き続け一日二日の休みに休
 養して全快する心算にて三十日迄一日
 も休まず出勤責任觀念は相當強かりし
 様思はる、三十一日床始めて醫師の
 診斷を受け急性肺炎に進展む絕對安靜に
 て治療を要することとなり工場内静養
 室にて治療

一、明けて本年一月二日一ノ關工場より誠
 一病重し念のため知らすの電報あり。
 同夜父母一ノ關に向ひ三日早朝午前
 中は小床意識も明瞭談話もよく通ず。
 一、三日午後三時半頃より少しく變調急
 變四時逝去(所謂三ヶ日のこと故私に
 て四日を命日とす)

(昭和十年一月 父中曾根都太郎)

中會根君の死を悼む

太田三郎

年改まりて来た四日。誰しも屠蘇のほろよひ機嫌に輝かしき初春の賀詞を交はして居る時、皮肉にも惘然として一つのすぐれた魂は、地球の一角より消え去つた。



我等未だ學窓去りて一年経たぬに既に此處にクラスメート、中會根誠一君の姓名は我等が名簿より永遠に抹消さるべき運命になつてしまつた。恐るべき死

！この儼然たる事實に對して再度我等は人の一生といふ事を反省して見る必要はないだらうか。自然の恐しい魔の觸手は何時何處に豹然として現れ人の意表外に出てその暴威をたくましくするかも知れない。それにしてもあまりにも現在の我々は表面的な生き方をして居ないか、もつと突込んで個の中に全を刹那の中に悠久を達觀して行く生命を持たなくともいふのだらうか。

省りみれば兄は物事に對して實直そのもので竹を割つた様な活氣のある青年であつた。妥協なしに大膽に何處までも自分の所心を貫徹する熱血漢であつた事はあの偉大な体格が、あの蒼聲が、眼鏡の中の眼光が、證明して居た。そして痛切に勇躍しつゝ人生の秘義を探らんとするタイプ的主にして少しも沈鬱な所なく誰にも好感を以つて迎へられる人であつた。兄は卒業後直ちに昭榮製絲に入社し旬日ならずして小山工場に赴任せられ現業を擔當して往來の明晰な才能と立派な手腕を充分に發揮して克苦勉勵よくその

職務に忠實に幾多斯業の爲に貢獻する所あり、兄の前途益々囑望されて十月には一關工場に榮轉して今日に至つたものである。

東北、其處では人々の生活があくまなき天界の悲惨な威力に壓倒されてともすれば人類文化の中心より見逃され勝た。自然それは人心に大なる影響を與へずには置かない。

そこで兄は新しき路を開拓するのになにに苦しみ悶えたか。不撓不屈何物も打破らねば置かぬ彼の氣象で如何に重任に耐えて来たか。従つて其處にはかくされた裏面の血の出る様な苦闘があつた。それは又君自身で苦しむ又君自身で慰めなければならぬ苦しみであつた。然しこの苦惱、懊惱がこの時分よりいさゝか心的に疲勞した兄の肉體を喰ひ初めたのに多忙な兄は氣がつかなくなつた。

終始茨の路にありて兄は今一步將に開かれんとする一歩手前で、目前の光明を眺めながら終に病に打ちのめされた。兄の氣持はさぞ無念であつたらう。あきらめられぬ不覺の涙に身の不遇を嘆いた事だらう。

兄よ、我々の身勝手な想像を許してくれ。こうであらう、あつたらうとたぐり出す思索の絲は断えぬ。思ふに兄の死はあまりにも急であつた。短い生涯であつた。夢多かりし青春時代、多感な兄の胸中にはどんな機關が雷かき喜びに満ち流れて居た事か、兄の將來の希望や抱負の一端を胸禁を開いて、腹藏のない所を開かせてもらひたかつた。今一度兄が偉大な風貌に接し蒼聲にて口ずさむ歌が開きたかつた。既にして空しく兄は今雲上の人となりて再會せんすべしなし。

兄よ、今上田は物皆凍りつく零下何度といふ嚴寒だ。低くたれた灰色の雲より毎日の様に粉雪がちらついて居る。だが然し冬も半ば過ぎればやがては春の訪れも間もあるまい。さすれば兄よ、兄が三年の間啼くまれた上田の町にも花が開き鳥がさえずり若草は緑色に萌え出るだらう。野も丘も林も森も一面に棚引く霞に深く包まれ遠い連山の淺雪淡く、千曲の河も再び陽光に輝き出すであらう。何をみるにつけても不歸の人となつた兄ではあるが、この地球の何處かに、この太陽の下に、この大氣の中に、實在の兄が健闘を續けて居る様な氣がしてならない。今幽明相分ちて我々は只々兄の御靈の上にとこしへの春が來らん事を祈ると共に御遺族の方々に謹んで哀悼の意を表する。

故中會根君の死を弔ふ

西山徳治

去る一月九日午後三時突如として中會根君急性肺炎のため東北の客地に倒るの報を受く。學生時代の君が健康を思ひ、亦新春頭頭君が筆になる年賀状に接したる我々は之の不慮の訃報を信ずる事能はず。唯耳を疑ひ眼を疑ふばかりなり。然れども天は嚴かに君が死を宣し、黄泉の客と旅立たしめ一月十日午後一時故郷の太田町に於いて哀調極みな告別式を行はる。顧みれば君は二十餘年前嚴父中會根太郎氏の長子として九州の軍港佐世保に生る。父は中學校長として教職に在り。轉々として嚴父の榮轉に従ひ、十餘年前兩親及び三男一女の家族は再び本籍の群馬縣に歸る。

君の出身中學は縣立富岡中學校なり。昭和六年四月上田蠶絲専門學校製絲科に學び頭腦明晰、志操堅固良く級友の規範となり其の將來を刮目する。殊に君が資性たるや群馬人の長所を遺憾なく發揮し、熱情と俠氣に溢れ亦反面恬淡水の如きものあり。接する人をして無限の温味を感じし亦無窮の信頼を置かしむ。

昭和九年三月卒業の榮を擔ふと共に昭榮製絲株式會社に入社して、栃木縣小山町の同社工場に勤務する事六ヶ月間忽ち其の英才と人格は同社首腦部の認めるところとなり、昭榮製絲の金庫岩手縣一ノ關工場に轉勤を命ぜらる。爾來君は不眠不休同社のために活躍し將來の大成を確かんとせしに、舊臘中より突如急性肺炎の冒すところとなり病床に呻吟中なりしが遂に病魔と宿命に抗するを得ず新春一月四日幽明境を異にし金厦玉樓中の人となる。思へば天の無情なるか、君が運命の果敢なかりしか、二十五年間養育の兩親の鴻恩に報ゆる事能はず、亦我々と再會談笑の機を待たずして二十五歳の青春を一期とし、巨木の倒れる如く逝く。誠に哀惜の極みなりと共に蠶絲業の難局に共同突破を誓ふ我々級友のメンバーに於いて君の如き強力なる一員を失ふは一代の痛根事なり。今は我々残された唯一の思ひ出として、君が在りし日の面影を偲び之の一文を兄の靈前に捧げ君が冥福を祈るのみ。佛道に説く靈は亡びずと、而らば君が靈よ來たり受けよ。

佐藤彰二君の思出

金崎眞英

一月十四日佐藤彰二君が逝去せられた。従兄弟で同級生の佐藤愛之君が逝かれて一ヶ月餘、同君が亦後を追はれたのである。運命の餘りにも深刻なる悪戯を嘆かすには居られない。



吾々同級生は何の因果か一昨秋來大池小口、鈴木、佐藤(愛)の四君を失ひ未だ涙新しき今亦同君の訃に接したのである。全くS、O、Sと叫び度い。佐藤君は上田中學出の秀才で級中では

獨斷の最も良かつた人である。學生時代テニスの選手として吾々と一緒によく練習をやり、諸々へ仕合に出かけたものである。確か二年の時だと思ふがテニスの仕合に桐生の高工へ遠征し敗戦しての歸途、高崎で夕食を終へた一行が悪友の案内で同市の所謂名所を見物に出かけた時平素極めて眞面目の君の事として浮世の暗黒面に對しての驚き方は實に大きいものであつた。

流石に御家柄だけあつて御坊チャン育ちではあつたが、我儘な所は少しもなく極めて圓滿なる性格の持主であつたから一人の敵もなく皆に敬愛されて居た。邊幅を飾らない同君は大きな靴をはき首に風呂敷包をかけて毎日鹽尻の實家から徒歩で通學され、大抵は歩きながら勉強せられ試験でも特別に勉強はされなかつた様である。

卒業後佐藤一族の經營に係はる藤本蠶種株式會社に入社せられ、取締役として特に蠶種製造方面に活躍せられた。當時よく川中島の分場視察に來られ、その途次長野の試験場を訪問されたが、一昨秋發病以來君の卷脚胖姿を見る事が出来なかつた。

一昨秋大池君の葬式に列し共に御墓迄出かけた時最近體の工合がよくないとの事を聞かれ、更にその後君が病氣静養を知つてからも、何しろ甲種合格として入營せられた位の體格であるから大丈夫と思つて居たが、此の軍隊生活の無理が遠く今回の一因となつた様である。

君は病篤き頃より佛道に入り「生」を超越されたとの事であるが、君が逝去の数日前御令聞よりの御便りの一節「今は全快を望まない迄もせめて起居に不自由のない程度に……」を思ふ時全く涙なしに居られないのである。神に祈り佛に頼られた御家族方の願ひも虚しく消え失せ、儂なく現世を去られた今日、只々君が冥福を祈り、御遺族に對し謹んで弔意を表する次第である。

彰ちゃんの事ども

竹生

二三日夜を留守にして歸つて見たら、彰ちゃん御過去の悲しき御通知が届いて居た。丁度其朝高島氏と學校の話などの序に彰ちゃんの話が出て色々な思出話をしたのでしたが、これを偶然と云ふのであらうか？ 或は豫感とでもいふのであらうか？

私達は九回生として大正八年四月に入學した。彰ちゃんは首席であつた。養蠶科の新入生歓迎會の席上その當時三年生であつた金昌漢君から孔子様は九番目の生れてあんな偉人になつたのだから九回生の人達はきつと偉い人が澤山出るに違ひないと豫言せられたのでしたが、佐藤道君、大池彰君、小口一枝君、鈴木貞治君、佐藤愛之君と續いて鬼籍に入られ、非常に寂しく思つてゐた矢先、又復彰ちゃんの悲しき御報を聞く事になつてしまつた。

彰ちゃんはいつともキチンとしてゐた。眉目秀麗な貴公子を思はせる人でした。そして頭もズバ抜けて明晰で入學當時は仲々思ふやうにならないノートなども君のは實に要領がよかつた。寧ろ要領がよすぎで我々凡骨にはわからない位であつた。それほど簡明であつた。君の記憶のよいのも亦實に驚くほどであつた。あの面倒な微積分の公式の如きも、大抵なら一年もすればすっかり忘れてしまふであらうやうな難解なものでもよく記憶してゐて下級の人達から聞かれてもスラ／＼と問題を解いてやるといつた人だつた。君の頭のよさにはいつも羨ましかつた。私達だつた。それでゐて學校の事より他の書物ばかり読んでゐられたのでせう。毎日學校へ来るのにノートと他の本とを二つの包みにして兩腕に抱えて来るのが常でした。そこで私達は『彰ちゃんのバランズ』と尊稱を奉つた位でした。君は理知に走らず感情に隘せず、意力の強い

人でした。本を讀むにも凡ゆるものを片端から讀破して行く人でした。硬軟併せて讀むといつた調子でした。君は本を讀む事も速く理解も早く然かも記憶のよいのに驚かされた事の一例にこんな事があつた。一年生の時であつたと思ふが、養蠶の實習をやりに乍らゲーテのファウスト(或はグンテの『神曲』であつたかも知れぬ)の譯本を隣り間に讀破して然かも内容をよく記憶してゐられた。

又彰ちゃんは運動家でもあつた。彰ちゃんはテニスの選手で、前衛として胸のすくやうな素晴らしいプレーを度々見せて呉れた。

かくして三年の學校生活もいつの間にか終つて、入つて来た時と反對の道を這入つて別れ／＼になつてしまつた。

君は一年志願兵として入營された。その軍隊生活の模様を書かれた御手紙などには、しつ／＼なつかしきものも何となく通もあつた。私の文面の中には何枚かの彰ちゃんの御手紙も未だに藏つてある筈です。或る時の手紙には『この頃唱歌や讚美歌を教はつてゐる。月待舞や牧人の歌など。云々』といつたやうなものもあれば、或る時には『有馬武郎の愛に就いてを讀んでみます』といつたやうなものもあつた。學校に居た頃は彰ちゃんも戀をする事があるだらうかなと思つた位でしたが、やはり彰ちゃんも青春を爛んでゐるのだなと思つた事でした。

其後御商賣で遙々私の方まで來られ、其度に私の家へも寄つて呉れた。其頃の彰ちゃんは随分元氣であつた。年に一度位ではあつたが、御訪ね下さつては色々な思出話に、楽しい時を喜んだものでした。それも僅か一時間か二時間でした。その度に私は友達の有り難さをしみ／＼と味はつたものでした。

君は例の用意周到さから大きなトランクの中には毛布だの石油ストーブなど入つてゐると聞いて驚かされたものでした。其後しばらくお逢ひする機会もなかつた。一昨年の秋、妻の父の不幸があつた折彰ちゃんも御會葬下され、其の際たつた十分間許り庭で立ち話しをしてお別れをした。その時はやはりお体の加減がお悪かつたのか少しやつれてゐられるやうに見受けられた。これが彰ちゃんとお會ひした最後になつてしまつた。

昨年の十一月に妻が家へ行つて歸つての日に、愛之しやんも彰ちゃんも大分お悪いさうだとの事であつたが、忙しきにかまけて、遂々御見舞も差上げずじまつた。間もなく愛之君が亡くなられた。暮も近い或る日、佐倉の停車場で義助君にお逢ひした折彰ちゃんは如何です？とお尋ねしたら『どうも困りやう』とのお話でした。でもそれほどの事とは思はなかつた。其後幾何もなくして彰ちゃんも亡くなられてしまつた。お會ひしたいお會ひし度いと念ひ乍ら永久に其の機會を失つてしまつた。

私達九回生も漸く働き盛りに入つたばかりで、これからといふところ次々／＼と天國へ昇つて了つた。卒業アルバム委員の一人であつた私は十年経つたら又アルバムを作り度いと念願を持つてゐたのであつたが、その希望を實現しない内に、最早六人もの人達を失つてしまつた。今年の秋こそ十四年振り、様々に變つたであらう友達と學校でお逢ひ出来る事を楽しみにしてゐた折も折とて、彰ちゃんの訃報を見た刹那は暫くは茫然自失として部屋の中を歩き廻つたほどでした。身に近くゐた人達の死に際會しても生者必滅と案外平氣でゐられた自分もお友達の死には胸を打たれるものがありませう。

彰ちゃんも遂に逝つて了つた。呼び馴れた『彰ちゃん』といふ呼稱も最早過去の霧の中に飛び去つてしまつた。呼べど歸らぬ旅を行つてしまつた。未だ爲す可き多くの事を残し、有り餘る才能を持ち乍らそれをも爲し遂げず、遂に幽霊境を隔てゝしまつた。最早君の温存にも、聲に接する事が出来なくなつてしまつた。何故天は君にもつと多くの春秋を約束しなかつたであらうか？

君は蠶業に由緒深き家柄にお生れになつた爲めに(？)蠶業界に身を投ぜられた事と思ふが君が才を以て學的研究に没頭されたならば恐らく既に一家を爲してゐられたであらうと思ふ。と返へず／＼も君の爲めに残念に思ふ。あまりに地味な蠶業營業にあつた爲めに君が才能も、それほどはつきりとは現はれなかつたと思ふ。

私達のクラスの中でも最も將來を期待され乍ら、彰ちゃんも遂に逝つてしまつた。母校近くゐられた愛之君といひ、彰ちゃんといひ二人乍ら逝つてしまつた。母校を訪れる私達九回生にとつてこれほど寂しい事はない。母校を訪れる喜びとは異つた喜びを友達に逢ふ事によつてどんなに深く味ひ得た事か。然しそれも今は空しき夢と化し果ててしまつた。

母校を訪れる私達にとつて、校舎や校庭や、太郎山や、千曲川と同じ親しき學校時代の思出も心の内に湧き出でてゐらう。その思出の中には今は亡き友達の影響もきつと笑顔を以て現はれるであらう。

彰ちゃんの思出を記すつもりでペンを執つては見たものゝ、何にもまとまらずにしまつた。同級生の誰かの手によつて更によき思出をもつと整つた美しい文によつて綴られるであらう。拙い文であつても彰ちゃんの事については書かずにおられなかつた私でした。心靜かに彰ちゃんの眞福を祈り乍ら拙きペンを擱く。涙數行冷たく頬を傳つてこぼれた。

會費領收(一月廿一)

昭和九年度通常會費納入者

- 印は蠶絲學雜誌代共
- 絹村 貢(蠶一) 江頭 辰雄(蠶五)
- 小野 修(蠶七) 三好 圭一(蠶八)
- 市川 清(蠶三) 仲内 靜(蠶三)
- 植村 忠義(蠶四) 富 秀雄(蠶六)
- 三瓶常四郎(蠶六)
- 勅使河原齋之助(蠶九)
- 宮川千三郎(蠶廿) 山口永太郎(蠶廿)
- 小笠原振一(蠶四) 石坂虎治郎(蠶五)
- 宮入 誠(蠶五) 大池 登(蠶八)
- 好士 泰造(蠶八) 太田 正治(蠶三)
- 笠原 松平(蠶三) 内山 鶴雄(蠶三)
- 小島 求(蠶三) 岡島 末吉(蠶三)
- 正木 章三(蠶六) 中島 運(蠶六)
- 萩野 喜次(蠶七) 赤松 與一(蠶六)
- 宮城 忠夫(蠶六) 波野 文雄(蠶六)
- 大石 唯男(蠶六) 東家 明秀(蠶六)
- 延命 幸次(蠶六) 望月 弘(蠶六)
- 關 三四郎(蠶九) 收 道男(蠶廿)
- 松崎 昇平(蠶廿) 太田 三郎(蠶廿)
- 後藤 政之(蠶八) 橋本辰次郎(蠶七)
- 平林 茂(蠶八) 山名亨四郎(蠶七)
- 勝田清三郎(蠶七) 鈴木 力(蠶七)
- 手塚 勇(蠶七)
- 終身會費完納者
- 伊藤 夢魚(蠶四)
- 入會金納入者
- 完納者 三瓶常四郎(蠶十八)
- 大石唯男(蠶十九) 本多 懋(蠶十九)
- 金五圓也
- 朴 均宅(蠶十九) 枇杷木雄雄(蠶十九)
- 秦 彰(蠶二十) 寺井 子藏(蠶十二)
- 佐藤 一郎(蠶十三) 手塚 勇(蠶十二)
- 金壹圓也
- 千曲會規則第九條第一項第三號による未納會費納入者
- 金拾四圓也 安孫子文彌(蠶二)
- 金五圓也 横田 三平(蠶四)
- 金壹圓也
- 蠶絲學雜誌代
- 金壹圓也
- 森 干城(蠶一) 絹村 貢(蠶一)
- 篠田平三郎(蠶一) 佐藤良太郎(蠶二)
- 坂田 榮雄(蠶二) 北澤 茂(蠶二)
- 高島 秀男(蠶二) 小林 國造(蠶二)
- 倉澤 美徳(蠶三) 寺島 親雄(蠶三)
- 吉川 誠彦(蠶三) 佐藤 國一(蠶四)
- 廣見 豊一(蠶四) 橋原鶴次郎(蠶四)
- 手塚達郎(蠶廿一) 田浦 準(蠶二)
- 鈴木 康之(蠶二) 鹽見 喜六(蠶三)
- 久保田一徳(蠶四)
- 金貳圓也
- 芝 荒雄(蠶二) 安孫子文彌(蠶三)
- 伊藤 柳作(蠶一) 沖 濤治(蠶二)
- 高尾 才次(蠶二)

會員動靜

(二月五日現在)

- 須田 今三(蠶三) (勤)埼玉縣飯能町、飯能實業學校 (住)埼玉縣入間郡飯能町大字中山一〇ノ四
- 長澤 千丈(蠶四) (勤)京都市東洞院通り佛光寺下ル、明治製菓株式會社東京販賣所
- 小林 輝一(蠶四) (勤)從前通り(住)岡山縣玉島町住吉町
- 永田 平(蠶四) (勤)上田市、長野縣蠶業取締所上田支所
- 中島 茂司(蠶九) (勤)上伊那郡伊那町、長野縣蠶業取締所伊那支所
- 原 清志(蠶九) (勤)群馬縣太田町、群馬縣蠶業取締所利用組合(住)群馬縣太田町大門通り西八八一
- 中村 由枝(蠶一〇) (勤)平塚府幸町、平安南道蠶業取締所(住)平塚府八千代町七番地
- 内山 吉哉(蠶一三) (勤)ナシ(住)兵庫縣栗原郡繁盛村井内一六三
- 竹内 衛佐雄(蠶一六) (勤)ナシ改姓
- 酒井 嘉美(蠶一七) (勤)長野縣上高井郡須坂町、片倉田中製絲所
- 朱 寛洋(蠶一七) (勤)朝鮮黃海道黃州郡廳(住)黃州區黃崗里
- 山本 賢市(蠶一八) (勤)神戶市林田區御崎町一丁目、鐘紡武蔵理化學研究所
- 吉田 正雄(蠶一九) (勤)松本市蠶玉町、片倉普及園
- 町田 史郎(蠶二〇) (勤)富山縣八尾町、富山縣蠶業取締所八尾支所
- 百瀬 正(蠶二〇) (勤)水戸市、水戸工兵第五十聯隊第五中隊
- 手塚 達郎(蠶二一) (勤)松本市、松本歩兵第五十聯隊第五中隊
- 大野 孝治(蠶二一) (勤)福島縣伊達郡湯野村字田中一番地、日東製絲伊達工場原料課
- 新野元治郎(蠶二一) (勤)千葉縣千葉郡賀村、鐵道第一聯隊第二中隊第四內務班
- 小林 輝夫(蠶二一) (勤)宇都宮市、宇都宮第二聯隊第五中隊
- 水谷 清(蠶二一) (勤)滿洲派遣步兵第三十三聯隊第四中隊
- 依田 信一(蠶二一) (勤)滿洲派遣步兵第三十三聯隊第四中隊
- 森山 二郎(蠶二四) (勤)橫濱市中區本牧三ノ谷七五
- 高橋 安雄(蠶二七) (勤)東京市杉並區高圓寺、農林省蠶業試驗場(住)東京市杉並區成宗一丁目四三番地
- 富田 乙松(蠶二八) (勤)滋賀縣犬上郡河瀬村、若林製絲紡績株式會社
- 竹内 健二(蠶二八) (勤)朝鮮江原道平康警察署(住)全上署長官舎
- 緒方 良純(蠶二二) (勤)東京市京橋區京橋三丁目、片倉製絲紡績株式會社
- 半田 辰緒(蠶二三) (勤)從前通り
- 山田 斧市(蠶二三) (勤)從前通り(住)長野市西長野町四四一ノ九
- 額本 啓一(蠶二四) (勤)新潟市、新潟縣蠶業取締所
- 香掛 聰(蠶二六) (勤)ナシ(住)長野縣小縣郡須原村
- 鈴木 玄九(蠶二八) (勤)長野縣西筑摩郡大桑村須原、鐘紡木會工場
- 原井 國男(蠶二八) (勤)ナシ(住)熊本縣下益城郡小川町
- 瀧澤 幸司(蠶二九) (勤)川崎市府町、昭和肥料株式會社内昭和人絹試驗部
- 荻原 行雄(蠶三〇) (勤)佐賀縣小城市、片倉小城市工場
- 山本 金之助(蠶三〇) (勤)滋賀縣栗太郡津村馬場三八五
- 益淵 誠正(蠶三二) (勤)下關市、下關重砲兵聯隊第六中隊
- 副田 好美(蠶三二) (勤)福岡市、福岡歩兵第二十四聯隊機銃隊
- 林 正平(蠶三二) (勤)東京市京橋區三丁目、片倉製絲紡績株式會社
- 高橋 利光(蠶三二) (勤)滋賀縣長濱町外六莊村、滋賀縣蠶業試驗場(住)滋賀縣六莊村平方五二
- 巢山 喜吉(蠶三二) (勤)廣島縣佐伯郡大竹町、新興人絹株式會社大竹工場
- 阿久澤孝典(蠶三四) (勤)全上社宅
- 岡 豊次郎(蠶三五) (勤)神戶市須磨區磯馴町一丁目六五
- 笠原 五郎(蠶三六) (勤)津市八幡町二二五
- 橋本辰次郎(蠶三七) (勤)福井市乾新町一二六、第一工業製菓株式會社福井出張所
- 星野 進(蠶三〇) (勤)奉天末廣町四、奉天製菓株式會社
- 田村朝之助(蠶三二) (勤)坂口改姓
- (住)前橋市諏訪町六二

編輯室より

石倉先生から有益な御玉稿を賜り巻頭を飾る事の出来た事を喜ぶ。常に本紙に寄せて下さる絶大なる御好意には誠に感謝に堪えぬ。

藤井料君より年賀廣告の誤謬に付きお叱りを受けた。他の誤謬と合せて此處に訂正しお詫び申上げる次第である。

九面二段 昭和九年 昭和十年
 十面三段 加々木精喜 加々木井精喜
 十一面二段 新穂 利吉 新穂 利信

原稿を普通の信書と同様に取扱ひ多額の切手を貼布して送附せらるゝ向が多いが之れは開封にして二錢切手を貼布する(第四種百円迄迄)方が特策である。但し之の場合通信文は別便とせねばならぬ。

◆今月の本紙は春秋に富む多数の同窓の死を御報告申上げなければならぬ事を悲しむ。そして必然的に多数の弔慰文の殺到となつた。内容たるや全く切々たる哀愁を以て綴られ涙なしでは讀めない。筆者の切實な氣持に思ひを致した時如何その量が多いとは云ふ全部之を載せざるを得なくなつた。そして十八頁と云ふ開闢以來の大冊とはなつた。讀者はこの氣持は察して呉れるだろう。そして悲しみの一部を負担して呉れると信するのである

◆千枚氏が原稿を七五六字の倍數にしてゐるなんて無理な註文だと云はれたが無理で

丸山 力藏(紡一) (勤)鹿兒島縣川内町大小路、日本織絹株式會社川内工場

唐澤 正(紡一三) (勤)宇都宮市、宇都宮警備隊第十八聯隊第二中隊第五班

佐藤 一郎(紡一三) (勤)大阪府北河内郡鹿野村大字八雲第二下島、東洋紡績守口工場(住)大阪府北河内郡守口町中捨屋方

根本 健治(紡一三) (勤)大阪府東區五町二、三和ビル、錦華紡績株式會社

名取 雲子(紡一七) (勤)松本市、松本歩兵第五十聯隊第九中隊

清水 雪子(紡一七) (勤)宮下改姓(勤)中華民國濟南二馬路吉祥公司

高柳たかえ(紡一八) (勤)長野市北石堂町二三八

市川みつゝ(紡一八) (勤)金井ト改姓(住)上田市仲町文化スタジオ内

中澤 小新(紡一八) (勤)ナシ(住)長野縣南安曇郡豊科町四七〇

吉川 小新(紡一八) (勤)ナシ(住)長野縣南安曇郡豊科町四七〇

安達 たか(紡一八) (勤)古知ト改姓(勤)鹿兒島縣志布志町、薩摩製絲志布志工場蠶業課

笹川ヨキ子(紡一八) (勤)田中ト改姓(住)東京府下三鷹村幸禮一〇〇

(勤)廣島縣廣瀬郡所、廣島縣青品郡府中町

あるうとなかろうとやつて貰へば都合のいい事は註文した方が得だと思つて書いて送だ。要するにやれたらやつて貰ひ度いと云ふ譯である。又叱られるかも知れぬが無理な註文を一つ——原稿の總字數はなるべく三七八〇字以内にして戴き度い。そうでない一部が來月に割愛されるかも知れぬといふ事である。

千曲會指定旅館

上村ホテル
 上田市海野町
 電話三二七番

旭工業商會
 正會員 飯島貞雄
 東京市芝區田村町三ノ七
 電話芝(四三)一七二八

御來店のお土産は
 カサネ餅 上ノフルーツ
 杏ゼリ チョコレート
 晒水餅 黒羊羹
 杏羊羹 クルミ羊羹
 信濃そば 果物類 雜詰

上田市松尾町
 電話二六〇・二五四

上飯島商店

御宴會に御會食に
 レストラン
 香青軒
 明朗な洋室 落付いた
 和室 (數室)
 上田市袋町 電話13番

竹下文英

高崎市赤坂町七六番地
 坂路商店
 電話一三〇九番
 振替口座東京三三九番

紡織、蠶絲、レヨン、電氣、理化學
 其他諸機械器具、冷凍機械裝置
 設計及製作